

青春の思い出

栗竹 章二

人間誰でも嫌な事楽しかった事など、いろいろな思い出を持っているものだけど、それならば思い出したくない嫌な思い出を忘れ楽しかった事だけを思い出として残せば、人生楽しく送れると思ひ、あの大変な戦争の時に今でも楽しく思い出されることの場面を60年過ぎた今忘れない様に少し書き残して見たいと考え、この様なことを始めました。

南方への憧れ

昭和18年8月夏の最後の滑空訓練合宿で、念願の滑空士試験に合格し9月に憧れの少年航空兵の試験を受けるべく資料を取り寄せたら、視力は1.2以上眼鏡不可との事でこれは受験資格無しと涙を流し失望致しましたが、これが命拾いになりまして若し合格して居りましたら、今頃は靖国神社に居る事でしょう。

それならばと兄が陸軍の軍政要員としてインドネシアのジャカルタに居るから私は海軍の軍属として、やはりインドネシアに行きたいと心に誓いました。兄は幼少の頃より足が悪く障害を持って居りましたので、兵隊として御国に尽くすことが出来ないと軍政要員として志願致し、当時ジャカルタの魚市場の監理官として勤務して居りました。

丁度兄の最初の上司のお父様が退役の陸軍少将で親しくお出入りを致して居りましたので参上致しご相談致しましたら、とても喜ばれ三男の方がセレベス民政部鉱産課長**安田三郎**司政官でセレベス民政部の俸の所に行くように手配すると奔走して下さり、海軍省南方政務部部長の御名前は失念致しました少将の方が郷里鹿児島の中学の後輩だからと直談判をして下さり、募集締め切り後にもかかわらず強引に追加試験を受けさせて戴き採用の運びになりました。これで兄と同じインドネシアに行けると早速に二松学舎大学の夜学のマレー語講座に通ったりインドネシア関係の参考書などを読み漁りました。

当時は戦時下の特例として12月に繰り上げ卒業だったので、出発は極秘だけど大体1月頃の予定だと聞かされ、心の準備を致して待って居りました。1月に入り海軍省より準備の為出頭命令が来まして、防暑服その他の支給がありその内任官すれば必要だから軍刀の用意をするようにとの事で、父と九段下の軍装店に軍刀を買いに行きました。その際万が一の為に短刀を買いまして、親戚の鶴子さんがとても綺麗な錦の帯地で袋を作り門出を祝ってくれました。

出発も間近になり親戚や学友を呼んで私の送別会をしてくれる事に成り、父はあの物の無い時代にどの様にして集めたのか、河豚を始め軍部御用達の料亭でもあれだけは揃わないだろうと言う位お魚を河岸から調達して呉れました。

深川の河岸行きの中で日本舞踊の名手と言われた母方の叔父が、私のリクエストで座布団の中だけで「かつぼれ」を涙を流しながら踊って呉れたので私も便所に駆け込み声



送別会にて 久保田、有輪、私、荒井の諸兄昭和19年1月

をあげて泣いたのを覚えて居ります。

父は二人の息子の内残った一人も又戦地に出すのに、終始笑顔で学友に肴を勧めて居りましたが、今思えばさぞや胸の内は寂しかった事と思います。

出発からシンガポールまで

昭和19年1月30日に深川の家を出ました。近所の方々や親戚や学友が見送りに来て呉れまして、その時祖母とは今生の別れとなりました。最初私一人で佐世保まで行くつもりで居りましたら父が一緒に行くと言うので驚きましたが、とても嬉しくこの旅が父との別れになるかも知れないと心に思いました。

2月1日に佐世保で当時の日本最後の豪華船浅間丸に乗船致しましたが、現地係員の連絡ミスで出発の時間が間違えて教えられた為にあわや置いてきぼりに成る所で、危機一発で間に合いました。後日の戦友会などで良くその事を戦友からかわれました。

我々のグループは同じ民政部に赴任する七人で、戦後までそのお付き合いは続きました。青木、浅野、邱（キユウ）、中村、真野、野坂氏、栗竹と船室も同じで仲良く皆で歌など歌って恐怖の毎を送りました。

我々の船団は浅間を旗艦としての18隻の大船団で、途中台湾の基隆沖で敵の潜水艦の船団に襲われ、フランスより拿捕した最大の豪華船帝亜丸が目の前で轟沈致し、その他多くの舟が沈められ目の前で沢山の人が死んで行きました。（後で安田さんが海軍省に行き部長に直接会って「私の息の掛かった者を何故帝亜丸に乗せなかったのか？」と横槍を入れたそうですが、マカッサル行きは皆浅間丸ですと断られ返って命拾いをして良かったと話して居られました。）浅間丸も魚雷を避ける為にジグザク航行で船体が異常に軋み不気味な音は今でも耳に残って居ります。

然し死の恐怖を目のあたりにしてましたが、何故か野次馬気分で周りの徴用工の人達がお念仏など唱えて居るのを平然と見まわし、舷側で魚雷の来るのを「あつちだ、こつちだ」と大声で叫び甲板士官にどやされ静かにしろと叱られました。

やはり子供の時から御祭り大好きなノーテンキで、この様な危機に直面しても案外冷静に自分は死なないんだと信じて居る暢気者で、この性格は今でも変わらないと思っています。

何度かの襲撃を逃れ無事に占領地昭南島と呼ばれていたシンガポールのセレーター軍港に入航したのは2月10日の事でした。2月12日にシンガポール東北部のローヤン兵舎に連れて行かれ乗船待ちの為に滞在する事に成りました。兵舎では毎日手旗信号やモールス信号海軍体操などまた部隊対抗の競技など行われ充実した日々を送りました。

いよいよ2月27日に出発が決まり何処に行くとも知らされず物凄いオンボロ船に乗せられバンカ海峡を通過して航海は続きました。ある時甲板で乗組員に「何処に行くのですか？」と聞いたら何の躊躇いもなしに「ジャカルタだよ」と言われ飛び上がらんばかりに驚きました。ジャカルタには兄が居ると思うだけで後2日間興奮して夜も眠られず時の経つのをこんなに遅いものかと痛感致しました。

兄と再会そして別れ、ジャカルタの3日間

3月1日に船はジャカルタのタンジョンプリオクに入港致しました。この街に兄が居ると言うだけで胸が一杯になり会えるだろうかと心配致しました。その日は海軍下士官兵集会所に泊まることに成りました。

早速に管理所長の一等兵曹の所に行きまして、恐る恐る「兄がジャカルタに居るのですか？連絡を取る事が出来ますか」と聞きますと電話番号でも判るかと言われ判りませんと答えると「ジャカルタには日本人が3千人も居るのでとても探し様が無いと」言われがっかりしますと「お兄さんは何をしているの？」と言われたので「Pasar Ikan（魚市場）に勤務し

ているそうです」と答えたら急に態度を改め「貴方 Pasar Ikan の栗竹さんの弟さんですか？」と言われ「ハイ」と答えたら「栗竹さんにはお世話に成って居ります、直ちに連絡致します」と直ぐに電話を掛けて兄を探し出し私が到着した旨を伝えてくれました。、兄もさぞや驚いた事と思いますが、まもなくしてサイドカーに乗って到着致し、約3年ぶりの再会を果たしました。



兄は当初別の仕事で赴任致しましたが、昭和17年5月に内地を出まして、9月頃行政の安定に伴い物資の供給の為、流通機構整備の必要に迫られ、魚市場を市が管理する事に成り、適当な人物を探して居った時、魚市場の仲買の倅で永年市場で働きその機構に精通している**兄隆冶郎**が見つかり、日本人只一人で乗り込み權益を損なう華僑系高級職員達と血みどろの攻防を重ね遂に彼らを説得致し、

兄隆冶郎と 昭和21年6月 復員記念
漁民には船舶用油と魚とのバーター取引を開始致し漁業組合を設立させて、価格の不当な廉価と沖買い横流しを防止致し、集荷量の飛躍的増加を為し、又高級魚には入札、競り制度の導入で闇に流れる魚を市場に安定供給させるなど、多くの改革を行い、軍や行政機関から何回も勲功章を戴き、ジャカルタでは「パッサル、イカンの栗竹さん」と名の通る人に成りました。

本来通過部隊は防諜の為に外出禁止なのですが、所長の責任において特別に外泊を認められて其の夜は兄の官舎に泊まる事が出来ました。この件は後で兄に聞きましたら、下士官兵集会所にもお魚の配給で所長とは顔見知りなので特別の計らいをして呉れたとの事です。

当時兄は陸軍軍政監部最高顧問**北島閣下**の官舎の別棟に住んでおり、もう夜分遅いので明日ご挨拶致す事にして、その夜は明け方まで三年間の空白を語り明かしました。

翌朝閣下はお加減が悪く伏せて居られるとの事でご挨拶は後でと兄のサイドカーに乗らして勤務先のタンジョンプリオクに有る魚市場に行きました。兄が幹部職員に紹介致しますと皆さんが良く御無事でと喜んで歓迎して呉れました。その後兄は約200人の職員労務者を前にして朝礼と業務日程などの訓示をとて流暢なインドネシア語で行いました。高等小学校だけの学力しかない兄が、3年であるようになるのには並大抵の努力だったと感心しながら兄の姿をまぶしく誇らしく見ておりました。

その後仕事の段取りをつけて私を連れて兄が目を掛けて戴いているジャカルタ海軍武官府の**前田海軍少将閣下**の所に、私の赴任に対していろいろとお手配を戴いた御礼に参上するとの事で、とても美しい街並みのナッシュヨブルバードに有る前田閣下の官舎に参上致しました。先に電話を致してありましたので閣下は会議の為ご不在でしたが、官舎には日本人の年配のご婦人が二人居られまして、閣下から電話がありましたと御昼の仕度をして待って居て下さいました、兄は私が内地を出発してから音信不通なので心配して閣下にその旨申し上げたら、閣下が部下に調査を命じられてシンガポールまで来た事が判明したとの事で、そのお礼に行くのだと聞かされ、海軍では一番身分の低い一理事生の為に、武官府の調査とは誠に恐れ多い事で、後でマカッサル着任後、民政部で栗竹の着任を武官府から問い合わせが有ったと不思議がられ、私は知らないとしらを切りつづけました。

後にインドネシア独立の影の立役者と言われた前田閣下にお手配戴いたとは誠に光栄な事で、参上致した時も閣下からの御指図でお留守のご婦人がお赤飯と鯛の尾頭付きで持て成して下さいました、誠に光栄な事で感激で胸が一杯に成りました。それに兄と会えた緊張の為か下痢になり体調を崩して私の為に作ってくれた御馳走も食べられませんでした。ご婦人方と兄は懇意らしく私達の再会を涙を浮かべて喜んで下さいました。然し兄が何故北島閣下や前田閣下など当時飛ぶ鳥を落とす勢いの陸海軍の高官に可愛がられお付き合いがあつたのが不思議でこれも兄の人柄なのかなと思って居ります。

その後兄のサイドカーでジャカルタの街を隈なく見物致し、同行の皆さんは宿舎に缶詰

なのに私だけ好い思いを致し申し訳無い気持ちでした。

見物を終わり一旦宿舎に戻り、其の晩は集会所の所長の好意で別室にて私の為に歓迎と送別会を北島閣下の秘書官**常吉司政官**（佐官待遇）を始めジャカルタ市役所や市場関係の幹部職員など兄の上司や同僚の方など沢山の方々が見えられ、兄も市場より良いお魚を沢山厨房に運び込み、中国系の料理人が腕を振るいまして戦時下の内地ではお目に掛かれないような大御馳走で、同席した宿舎の所長も今までこんな御料理は始めてだと言っていました。

兄がもう二度と会う事が出来ないかも知れない弟に出来る限りのことをしてやろうと言う気持ちがとても嬉しく、何も言えずに目をまっ赤にして涙を堪えて居りました。

私は御馳走を面前にして下痢の為食べられず残念でしたが、それより感激で胸が熱く、なり涙を堪えるのが精一杯でした。兄もやはり余り箸が進まず、私と同じ気持ちではなかったかと思えます。もしかすると後幾日かでもう二度と会えなくなるかも知れないと思うと、さすがのノーテンキの私も肉親の情には複雑な心境でした。

私の具合の悪いのを聞いて所長がお粥を作るように命じ、コックさんご自慢のお粥を作ってくださいました、そのお味の美味しかった事世の中にこんなに美味しい物が有るのかと感心致し、未だにあの味は忘れません。

私は何故か戦時下とは言いながら、食べ物には恵まれ戦後の物不足の時代にも、食べ物で辛い思いはないくらい良い星の運を持てたのだと信じて居ります。

其の後兄が沢山の品物を用意して呉れまして、特にトランクは皮製の素晴らしい物で大型のWのトランクで、珍しいコードバンの短靴や防暑服を作る白の洋服地など、内地では見られない物ばかりトランク一杯に持たして呉れました、内地から持ってきた物は古いトランクと共に兄に処分してもらい整理に遅くまで掛かりました。これらの品々は任地にて人に差し上げたりトランクは引揚げの際マリンプンに置いてきたしシーマの時計やウォーターマンの万年筆はやはりマリンプンで蘭印軍のアンボン兵に強奪され何一つ持って帰ったものは有りません。

翌朝出発のジャカルタ中央駅に来てくれる事に約束致し寝る事に成りましたが、なんとなく興奮して寝着かれないで夜が明けました。

駅に参りますと広い無人のプラットホームに特別軍用列車が止まって、それに乗り込みますと、常吉秘書官始め昨晚見えた方々が大勢見送りに来られまして、車中で食べるお菓子やその他沢山饅頭を戴きました。勿論見送りは其の方々だけで皆さん声を掛けて激励して下さいまして、発車するまで見送って下さりこれも兄の人徳のお陰と感謝致しました。。兄が言いつけて下男に朝早く珍しい果物を大きな籠に山盛り一杯列車に積み込んで呉れまして、幸いお腹の方も回復致しスラバヤまでのおやつには充分で車両の皆さん全員おすそ分け致しました。

発車の時間が迫りますと兄の顔を見て居られず、胸が一杯で言葉が出ず、兄が何か言っているのも耳に入らず、もうこれが今生のお別れかと涙で何も見えず、汽車が動き出すと兄の手が離れた途端に恥ずかしいように声を上げて泣き崩れました。其の時青木さんが優しく肩を抱いて「思い切って泣けるだけ泣けよ」と言ってくれました。

泣けるだけ泣いたら今度スツキリしてお粥腹だったので空腹を覚え仲間と談笑しながら差し入れのお菓子や果物を食べました。

汽車は薪を焚く機関車で大きな火の粉が飛んできて窓を開ける事が出来ず、ベンチも木製で尻が痛くなりますが、もう命の危険は無くおやつは沢山有るし変わった景色を見ながらスラバヤまで、二日間のジャワ島縦断の旅はなんとなく浮き浮きした行楽気分ですら中賑やかに楽しく語りながらの戦争を忘れたやすらぎの時間でした。

やがて汽車はスマランを過ぎ **3月4日** 夕刻にスラバヤに到着致しました。其の夜はスラバヤに泊まり、翌日マランの**吾妻ホテル**に船待ちの為に移動宿泊致しました。

マランはスラバヤから200Kほど離れた軽井沢のような素晴らしい高原の避暑地で、もともとオランダ時代の高級住宅都市でした。

夢のマランの一ヶ月

戦時中の我々の年代でホテルに泊まる事なんて恐らくあり得ない時代でした、宿屋は経験がありますが私もホテルは初めてのことでしかも長期滞在とは夢のような事でした。何もかも珍しくワクワクした気持ちでした。

部屋には大きなWベットがあり、中に細長い枕の親分のようなものが置いてあり、これはダッチワイフと言う物でこれを抱いて寝るととても涼しくお腹も冷えないので、寝冷えの予防にもなりとても便利なもので帰国するまでマカサルでも愛用して居りました。

私は中村 泰氏と同室でこの事がご縁に成り現在に至るまで私の無二の親友として、泰ちゃん章ちゃんと60年間家族ぐるみのお付き合いをして居ります。

中村氏はこの後も復員するまでマカサル、マリンプンでも一緒に生活を共に致す不思議な結び付でした、彼は帰国後明治大学に進学致し、卒業後銀座の老舗田屋洋服店に入社致し以後一貫して男子服装業界を進みネクタイ、高級シャツなどの会社の経営幹部を勤め色彩関係のエキスパートとして活躍致し、現在は業界仲間のコンペの会長として忙しい毎日を元気で送って居ります。

この夢の楽園のようなマランの生活はひもじい思いをした我々には、毎日の食事が楽しみでビーフステーキなどはお皿からはみ出すほどで、留守の家族に食べさせたいなと思いました。段段と慣れて参りますと、あのテキの肉は水牛でだから硬いのだとなく致し贅沢になって行きました。

ホテルの前には大きな公園があり、その中をお伽の国の汽車のようなのが走り、郊外のモンキーセンター迄行くそうです。公園を横切ると映画館があり良く見に行き、敬礼をするとどうぞと無料で見てました。斜めに大きな軍の酒保が有りまして、毎日午後一時に開店致し並んでビールの券を貰いに行くのが昼食後の日課で、売店でチェレボン製のタバコ、コーアやLUXの石鹸など売ってまして、使いもしないのに買ってホテルの箆の棚が一杯になりましたが、酒保で仲良くなった陸軍の航空隊の兵隊さんに、前線に出動する時にプレゼントしてとても喜ばれました。

酒保はとても安く現地の女性が大勢居りまして、毎日通い何時間もネバってインドネシア語の勉強の為、いろいろと話を致し楽しい時間を過ごしました。私の習った先生が速く上手になるならガールフレンドを作る事だ、と教えられ彼女達は二人一組なのでジャワ人のチンチエー、リンチエー姉妹と仲良くなりました。姉のチンチエーは20歳でとても頭が良く上手に毎日教えて呉れました、妹のリンチエーは17歳で何時もニコニコして大人しい可愛い無口な少女でした。少し話せるようになると面白く時間が来るのが楽しみで、彼女達も私の上達を喜び益々学習に熱が入りました。

日参したのはもう一軒で世界的に有名なアイスクリーム屋さんで「イタリア人の店」の支店がマランに有りました。スラバヤが本店でホテルの支配人が是非食べに行きなさいと教えて呉れまして、泰ちゃんと二人で出かけました。街外れの静かな所に目立たないお店ですが、とても美しいハーフカスの店員さんが愛想良く迎えてくれ、大きなカラー印刷の写真のメニューを見せてくれました。その種類の多い事アイスクリームにこんなにいろいろ有るのかと驚いてしまい、どれから食べようかと迷い、まず番号の一番から注文致したら、パイナップルのアイスで量も日本の3倍位でその美味しいこと、生まれて始めてあのような美味しいアイスを食べた事が無く二人で感激致しました。然しお値段も高く酒保のタバコが8セト、石鹸10セト、ビール12セトの時20セト致しました。、けどこの味は覚えたら止められず、それ以後毎日通い番号順に食べて行きました。どれも全部味が違いデコレもトッピングも又ものによっては銀の大皿一杯でお腹が満腹に成ることも有りました。

一番印象に残っているのは「Gunung Api 火山」で、大きな銀皿に何種類かのアイスで山を作り、周りを果物やその他で飾り、頂上にブランデーかしら火がついて居る素晴らしいもので、一人ではとても食べきれず、お値段も最高で確か70か80セント位だと記憶して居ります。

私は毎日でも良かったのですが辛党の泰ちゃんは飽きてきたと、私一人で通うようにな

りました。店では既に顔なじみなので、言葉も数多く交わせる様に成り世間話に近い会話も出来、もう座ると次ぎの番号の品を持って来てくれました。
今になって考えると、あの時代にどうしてあのような高度の製造技術が有ったのか、冷凍の機械は発達してたのかが不思議に思えますが、今にでもマランの忘れられない楽しい思い出のひとつです。

会話が出来るようになると、生意気に成り、昼間の酒保の真面目なおねえちゃんでは物足らなくなり、**青木先輩**がリーダーとなり、軍指定のキャバレー風の酒保に行くようになりました。そこには色の白いハーフカスの素晴らしい美人達が大勢たむろして軍国少年としてはまさにこの世のパラダイスで別世界に入ったような気持ちでした。兎に角俸給が27円で全額家族渡しになり現地での外地手当が35円の時、出発の時に仕度金として軍票で300ギルダ貰い、父が何かの時にと御守り袋の中に百円札を二枚入れといてくれたのを、ジャカルタで兄に両替してもらったのがあり、懐は温かいが何分毎日する事が無いので、食べたり飲んだり買い物をしたり、優雅な天国に居るようなお大尽の生活でした。

然し夜の酒保の代金は昼間の数倍で、そんな所に時々行けばお金は飛ぶように無くなり、遂に皆の財布は底を突くようになりまして、スラバヤの民政部の連絡事務所に給料の前借に行くことに成りまして、少し喋れると言うので私と青木さんが代表で行くことに成りました。

マランの輸送司令部に行き公用腕章と汽車の切符をもらいまして、2時間の旅に出かけました。スラバヤで聞きながらやっとの思いで事務所に行きましたら、「とんでもない奴らだ」と叱られまして、マカッサルと連絡を取り、私達と同行の農業指導員30数名の分と一緒にマランに届けてやる、とその日はお金は呉れませんでした。

兄にジャカルタを出る時スラバヤで若しも困ったことが有ったら連絡しなさいと、スラバヤ市役所の友人のメモを預かったのを想いだし、役所を訪ねて其の方に会いに行きましたら丁度出張中で同僚の方に訳を話したら、帰ったら用件を伝え後ほどホテルに連絡すると言って下さいました。

其の日は空振りでしたが、後日電話があり兄に連絡したら100ギルダ送って来たから届けて上げたいが忙しいので若し出来たら取りに来て欲しいとの事で、どうせ汽車賃は只だし又スラバヤに行けると喜んで居たら、**浅野の健ちゃん**が「俺もその手を使う」と同行する事になりました。

彼のお父さんは同盟通信社の重役なのでスラバヤの支局に行きまして支局長に話を致しましたら、直ぐに良くは覚えて居りませんが相当高額を借り受け、私を除く他の五人の分も用立てる事が出来ました。其の道中でとても面白い事がありました、丁度マランを11時頃出る汽車だと思いますが、二等車でマランを出るとき駅で屋根がごろごろ音があるので何かと見たら、屋根の蓋を開けて冷房用の氷を詰めて居ました。珍しそうに見ていると汽車は走り出し、其のうちに車内に岡持ちのような物に色々な種類の食事を持って回って来ました。廻りを見まわすと皆さん現地の方も好みの物を取り食べ始めました。私達もそれに習い美味しそうなものを取り「Berapa?(幾ら)」と聞きますと「Nante あとで」と言うので廻りも払っている様子も無いしきつと後で皿を下げる時に払うのだろうと思っていました。

其のうち汽車はだんだんスラバヤに近くなり私達は終点でなく一つ手前の駅で降りるので駅は近いし集金は来ないしヤキモキしてる内に駅に着いて仕舞いました。どうしようかとマゴマゴしてると隣の席の初老のご婦人がニコニコと「Tidak apa apa silakan pergi (構わないから行きなさい)」とウインクして促しました。二人で何か後ろめたい感じで汽車を降り食い逃げダーと駆け出しましたが、もっと沢山食べれば良かったなあと大笑い致しました。その後二度とそのような幸運はありませんでした。何か未だに思い出しては笑いがこみ上げます。

暫くしてスラバヤ事務所から**太田原書記**他1名が参りまして、農業指導員や私達全員を並べ「この非常時下にも然も戦地に有りながら毎晩飲み歩いて金が無くなり、給料の前借とは何事か。非常にたるんでおる。」と延々とお説教を受けました。

皆恐縮して深く頭を下げ申し訳の無い悔悟の念にうなだれて居りました。お小言が終わり解散致しますと大田原さんが「民政部の者は残りなさい」と言われたので未だ続くのかとうんざりしていると急にニコニコと態度をがらりと変えて「君達巧くやったな、マカッサルに着いたらこんな所は無いよ、ここに居る間は充分遊んで置きなさい、今夜は皆で楽しくやりましょう」と夜の街に繰り出し、最初の所は民政部の先輩として大田原さんの奢りで、後は何時ものお馴染みの場所で、お金も入った事だしドンチャン騒ぎの大宴会で、12時の閉店まで飲みつづけました。大田原書記にはこれがご縁で後々までお世話になりました。

後で聞きましたら本当は私達が連絡事務所に行った時に、お金を渡しても良かったのだけど、大田原さんもマランで遊びたかったので後で届けると言ったのだと、またお説教はあのように言わなければカッコが付かないだろうと笑って居りました。

マラン滞在も早くも一ヶ月近くになり、毎日のお決まりのコースも馴れて戦争をしているのを忘れるような楽しい日が続いて居りましたが、或日、近く出発するらしいから、其のつもりでとの通達が有り、長い間インドネシア語の学習の事で世話になった姉妹に時折石鹸などはあげて居るが何かお礼をしたいと言ったら、遠慮するのでお金も有る事だし奮発して金の指輪を二人に買って上げたら、とても驚き薄々別れだと気がついて居たらしく、涙を流して指輪のお礼を言って、最後に姉が実は妹は栗竹さんの事とても好きだったと言って二人で抱き合っ泣いていました。私はそんな気持ちはさらさら起こらなかったが、なんとなく毎日会いたかったのはやはりプラトニックラブと言うのかな、と急にいとおいしく思い握手をして別れました。

もうおばあさんになってしまったらうけど、あれからあの姉妹は幸せな生活を送ったのだろうか、ご多幸を祈るばかりです。

4月3日に全員マランを出ましてスラバヤに向かいました。連絡事務所の指示でホテルに泊まり、4月5日に港から小さな1000トン位の「大丸」と言う貨客船にギュギュウ詰めに乗り込みました。

出るとき大田原書記には格別のご配慮を戴き、後輩の我々に便宜を図って下さいました。スラバヤのホテルでは朝食の時隣のテーブルに従軍報道員の腕章を着けた作家の**森田たま女史**が居られ「お若いのにどちらに行かれるのですか？」と聞かれ「マカッサルです」と答えると「私もマカッサルには行きましたが、とても綺麗な所です、でもイタリア人のアイスクリーム屋さんには有りませよ」と30分くらい雑談を致した事がありました。

大丸の9日間の旅

いよいよマカッサルだと思つくと、興奮して落ち着かない気持ちを押さえ、まず第一の仕事は狭くて暑くて横になる場所も無い客室から出て、早く外のデツキの良い場所を確保する事でした。(これは大田原さんの入れ知恵で) 仲間に耳打ちしてそれぞれいち早く場所を確保できたのは大成功で、お陰で日中は暑いが夜分はとても快適で、見張りの当番以外の時はグツスリと寝る事が出来ました。

其のうち船はボルネオのコタバルに入港致しました。

とても美しいひなびた景色の田舎の漁港と言った感じで、何よりも驚いた事は海水の綺麗な事で、相当深いのに海底まで透明で色とりどりの綺麗な大小の魚が沢山泳いで、それは水族館の水槽を見ている様で、全員で歓声を上げて喜びました。

早速農業要員の連中が待ちきれず海に飛び込みまして気持ち良さそうに泳ぎ始めました。私達もそれに続けとばかり飛び込もうとしたら、甲板下士官が飛んできて「この海には猛毒を持つクラゲと海蛇が居るから泳いではいけない」と叫びましたので皆驚いて我先にと船上がって来ました。

後で聞くと毒蛇は居ないらしく禁止させる為の方便だったとの事です。

マカッサル海峡で敵潜水艦に寄る被害が出たので出港する事が出来ず、のんびりと4日間停泊して居りました。マカッサルを目の前にして、本当にイライラした気持ちですが、原

住民が毎日小船で果物やらインドネシアの菓子等を売りに来るので退屈はしませんが、着任すれば大変な仕事があるので最後の休養とコタバルの4日間を楽しみました。

マカッサル到着

スラバヤからジャワ海を渡りコタバルからマカッサル海峡を無事に乗越えて9日間の旅は遂に終わり、佐世保出航以来72日間の旅も最終目的地マカッサルを目の前にする事になりました。

4月13日にやっと目的地マカッサルの岸壁に船は到着致しました。船上から見た街は緑が多く、白い壁と赤い屋根が点点と見えるそれは美しい街でした。

私は感激で涙が流れ胸が一杯になり感無量の状態で立って居りましたら、突然岸壁より「栗竹、栗竹は居るか？」と出迎えの職員の中から大声が聞こえました。思わず目を凝らしますとなんと母校帝商の先輩の**大村さん**が手を振って居りました。私は驚いて駆け寄りまずと「遅かったじゃないか、マランで巧い事やりやがって」と到着早々突然にどやされまして、無事の着任を祝って呉れました。私も大村先輩がマカッサルに居るとは知らなかったのでもともと嬉しく心強く感じました。

この大村先輩と中村さんとは以後切っても切れない深い友情で結ばれ兄弟のようなお付き合いが生涯続きました。

もう一人マカッサルには小学生時代からの親友の**志田幸盛氏**が民船運航会に居りましてとても世話になりました。

その夜は中華街のホテルに泊まりまして翌日から海軍の規則、組織、民政の概要その他の講習と訓練が2週間続き農業要員と一つ所の合宿所に移りました。

合宿講習

この合宿訓練は我々農業要員と新任の理事生達がマランでさんざん遊び、戦争を忘れ心身共に腐りきって着任したと民政部ではもっぱら評判で、徹底的に叩きなおしてやると待ち構えて居る正に死の特訓でそれは厳しい物でした。

教官は着任草々の短期2年現役（現短）の**斎藤中尉**と**湯浅中尉**のお二人で海軍経理学校で優秀な成績を収め、セレベス民政部部員として着任された方々で、斎藤太兵衛氏は中央大学法学部卒業で栃木の太庄屋に生を受け、後に三菱重工kkに入社、あの重工爆破事件の際は広報室長としてテレビの報道などで大活躍を致し、最後は関連会社の社長として亡くなりました。湯浅正巳氏は慶応大学商学部から経理学校に進み、神田の出版社の御曹子で高級住宅地の青山高樹町で育った、毛並みの良い紳士で後に三井に入社いたしましたが、脱サラで色々な仕事を致しましたが最後は、京都で「とんちんかん」と言う豚料理専門のお店を経営致し、大いに繁盛致しましてマスコミの話題に成りテレビ、週刊誌などに良く名前を載せておりました、お二人とも癌の為に亡くなり、私も兄の様に慕いお世話になりましたので悲しい思い出です。

お二人共に着任初仕事でやる気満々の充実した真っ盛りですから徹底的にしごかれました。

5：30起床 直ちに海軍体操 市内マラソン

7：00朝食 8：00 軍刀術射撃などの軍事教練 10：00 学習講義

12：00 昼食 14：00 学習講義 17：00 終了

18：00 夕食 19：00 復習 21：30 就寝

学習講義は各専門科目の課長及び司政官及び技師などの講義があり午前中の疲れで眠くて眠くて我慢出来ずとても辛い思い出が有ります。

農業要員の諸氏は殆ど田舎から応募してきたので、洋式のトイレなどの遣い方から教育しなければならないと、湯浅中尉がこぼして居りましたが、この二週間の訓練は後の勤務に非常に役立ち未だに思い出として残って居ります。

勤務着任、部署任命

厳しかった2週間の合宿講習も終わり農業要員達はそれぞれの勤務地に派遣されて行きました。私達理事生は各課に配属されると思って居りましたら、全員主計課に配属になりました。私は安田課長の鉱産課に行くと思って居りましたが、後で安田課長から「近く内地転属が決まったので、傍に置いて面倒が見られないので、軍籍の課長の主計課長に身柄を預けた」と聞かされ、この事が私の為に後々とても良い結果に成ったのでした。

当時主計課長は二宮中佐で温和な然も優しさの内に毅然とした海軍士官でした。私達が任命されて間もなく課長は民政府に栄転なされ後任に小笠原少佐が着任されました。

小笠原孝義少佐は年子のお兄様と共に海軍経理学校を恩賜の時計組で主計課士官では小笠原兄弟として優秀さで名を挙げた秀才でした。33才でセレベス民政部主計課長の重責を担う若く



小笠原課長 大尉時代

新進気鋭の青年士官で、やはり優しくて思いやりの有る素晴らしい上司でした。

主計課は民政部という行政機関の大蔵省のようなもので、臨時軍事費、民政会計などのお金を扱う一番重要な部署でした。奇遇なことに課長は深川の生まれで、小学校も私の出た学校と近くで同じ深川育ちの江戸っ子どうしとして親しみ易くとても目に掛けて戴き、戦後も住まいも田園調布と奥沢と近くだったので90歳でお亡くなりになるまでお世話に成りました。

新任の7人は各係りに配属されました。中村の泰ちゃんは接収住宅の掛かりに、真野さんは珠算の名手の腕を買われ経理関係にそれぞれ配置されましたが、私は庶務係と言われ内心何か雑用係りのような気が致しましてがっかり致しましたが、これには後で聞きましたところ課長と湯浅中尉とのお考えがあつてのことでした。



主計科士官浴恩会会長時代

後年この人事で一番適切だったのは私の部署だったと小笠原さんが言って居られました。

藤野百合子先輩は大阪府庁出身の才媛で、民政部でも数多くいる女子理事生の中でもやはり主計課に居る西共枝理事生と共に、仕事の出来るトップクラスの秀才でした。湯浅中尉の命を受けて学校出て何も出来ない私を轍低的に教育するように言われ、まず数字の書き方から教えられ、先輩として事務一般全てを叩きこまれました。3歳年上のお姉さんですが厳しく仕込まれ後にとっても役に立ちました。ヨッピーは私の隣の机で長い髪の毛を三つ編みした、ネシアとしてはもう年頃を過ぎた年増に属する人で私より2ヶ月年上ですが、色が黒くて余り美人ではなかったけど、とても頭が良くオランダの高等教育を受けた敬虔なクリスチャンの秀才でした。語学も7ヶ国語位出来まして、タイプの腕も素晴らしく日本語も不自由なく話しました。この天才的頭の良い二人に挟まれ凡才の私は負けてならぬと一生懸命頑張りヨッピーには私と話す時はインドネシア語で話すように頼み、先ずインドネシア語を自由に話せるようにと頑張りました。話がスムーズに出来るように成ると

ヨッピーとも仲良くなり冗談も出来るように成るとヨッピーのことを妹のように可愛がって居た藤野さんは面白くなく、良く怒られましてヨッピーが陰で泣いているのを見かけました。

兎に角二人にとっては藤野先輩はとても怖い存在で、その藤野さんとは生涯不思議な縁で結ばれ姻戚関係になるとは当時夢でも判らない事でした。

庶務の仕事にもだんだん馴れまして、司令部や民政府その他官庁に重要機密書類の配達など出来るように成り、様子も解かる様に成りました。

敷島通り 1 2 番地から高砂通り 1 3 番地

業務内容も定まりますと仲間 7 人各自の宿舎の割り当てが決まりました。皆何処に決まるのかワクワクして待つて居りますと、なんと私は合宿講習の鬼教官湯浅中尉と斎藤中尉と 3 人で、海岸より一つ手前の民政部経済部の裏門通りの敷島通り 1 2 番地に住む事に成りました。

私は道路に面した日当たりのよい一部屋を戴き、志田君が早速私物の机と洋服タンスを持って来て引越しを祝って呉れました。

二人とも役所ではとても怖い上官ですが帰宅すると弟の様にととても可愛がって下さり、最初の官舎 敷島通り 12 番地 湯浅、斎藤中尉と共にこれがご縁で一生親しくお付き合いをして戴く様に成りました。

宿舎の生活は快適で内地では考えられないような毎日でした。藤野先輩が時折お惣菜など作って持って来て呉れ（湯浅中尉がお目当てなのですが）コックもジョンゴスもママアで時折湯浅さんが得意のお料理を作り、とても美味しく楽しみでした。

其の内主計課長の官舎に居られた二宮中佐が民政府の官舎に移られたので、後任の小笠原少佐が高砂通り 1 3 番地の官舎に入られることに成りました。

武官は武官同士の方が良いと湯浅さんと斎藤さんがご一緒に入ることに成り私も共に行くことに成りました。

この官舎には母屋に課長、湯浅さん、斎藤さん、そして私とパピリオン（別棟）には大村先輩と親友の中村氏が住まう事になりまして、6 人の所帯で課長の運転手のビドルを除きコック、ジョンゴス 3 名バブ 3 名庭師と 8 名の雇い人が居りまして、監督は大村先輩でした



高砂通り 13 番地 小笠原主計課長官舎

が、この先輩はずばらで余り熱心でなく、コックに適当にやられ余り美味しい食事は食べられませんでしたが、時折湯浅さんが厨房に入り、腕を振るって美味しい物を作って食べさせて呉れました。これが後に京都「とんちんかん」の礎だったのでしょか。

皆さん宿舎に帰ると課長は父親湯浅、斎藤両中尉は兄貴分として、和気藹々課長も役所に居る時は怖い上司だが帰って浴衣に着替えると別人の様に優しくなり、或る時役所でハマをやり課長に叱られて帰宅後拗ねて部屋に閉じこもり、ブンムクレにムクレて居りましたら、課長がドアをノック致しまして「章ちゃんご飯だよ」と呼びに来てくれました。

2 軒隣が湯浅、斎藤両中尉と同期の司令部主計課の藤井中尉と嘱託だった藤山一郎こと増永さんの宿舎で、其の 3 軒先が政務部長の官舎で前がセレベス新聞の宿舎、右前が三井物産の宿舎で我が家は四つ角の一角でした。

裏に4軒先の大和通りの角が第一女史宿舎で藤野さんが近くなると良く遊びに来ました。其の内湯浅、斎藤、藤井の皆さんは大尉に昇進されまして、藤井さんは良く湯浅さんの所に遊びに来てました。また藤山さんは自分の所のピアノが悪いので、良く我が家のピアノを借りに来てましたので、課長の居ない昼間に来て下さいとお願い致し、昼間だけ使ってもらう事をお願い致しました。

パピリオンの二人は野次喜多コンビでとても面白く、夜遊びに行きまして帰ってくる時課長達に判らない様に門のところで自転車を担いでソーッと入ってきますが、マンデー場で二人で大声で本日の成果を話しているのが、母屋に筒抜けに聞こえまして皆で大笑い致しました。この事は後々までの語り草で戦友会の時に良く話題に上り笑いの種になりました。

小説、映画などで知られましたカンピリーの敵性婦女子収容所の所管は主計課だったので良く所長の**山地兵曹**が連絡に来た時に豚肉をお土産に持って来てくれました。日頃粗食の我々としてはとても嬉しく湯浅さんの腕の見せ所で、色々なお料理を作っていました。

山地兵曹が連絡に来て呉れる日を心待ちに致して居りましたが、イスラム教徒ばかりの厨房では豚肉が来たと大パニックで、大急ぎで役所から帰り豚肉を受け取り処置に大変でした。コックは帰ってしまうし料理の後は厨房の大掃除で



湯浅さんと宝塚にて昭和21年10月

人員を同族に替えないと喧嘩ばかりして巧く行かないのでジョンゴス、バブも替えました。

今度のコックは女でとても気が強くてなかなか言う事は聞きませんでしたが料理は上手だし豚肉も平気で然も几帳面で誤魔化す事などせず勤勉に働きました。女でもとても威張っていて他の者を効率良く使い、家の中は整備されて行きました。

面白い事は彼らは完全分業主義で、バブも **Tukang tjtji** (洗濯職人) と **Tukang seterika** (アイロン職人) と別れて居り、洗濯バブが6人分の山ほどの洗濯を汗いっぱいかいてやっても片方は知らん顔で昼寝をしているし、乾しあがって今度は片方が懸命にアイロン掛けをしても知らん顔して昼寝をしているので、私がお互いに手伝えば早く終わるのでは無いかといっても知らん顔で、私は専門家だととてもプライドが高く妥協しませんでした。万事がそんな調子で山路兵曹が豚肉をもって来てくれた時など、お客を呼んで宴会をいたし、前もって「今日はお客だから2時間残業をしてくれ」と言った時は **Mengaruti** (解かりました) と言ったので安心しておりましたら、時間になると誰もいないのでカンカンに成り跡片付けに大騒ぎしたことが何回か有りまして、翌日集めて叱りますと **Tida tau**(知りません)とアクまでもシラを切り、頭に来た事も有りました。

部屋の中にタバコなど出して置くと必ず無くなって居り物は全部鍵の掛かる引出しの中に入れとかなないと盗られました。彼らにすれば悪意は無く出てるものは不要な物と判断して処分したつもりなのかも知れませんが「盗っただろう?」と詰問しても **Tida tau** とアクまでもシラを切り盗った現場を押さえなければ盗られた方が悪いのだと諦めなければなりませんでした。

ジョンゴス達にブツブツ云われ、タバコなどで機嫌を取りまして美味しい物を食べた後は大変でした。

その時のコックは文句ばかり言って、然も買出しの金を誤魔化すなど余り程度が良くなかったので、湯浅さんが替えることを提案して、マカッサル族からトラジャー族に替えました。そうなると使用



斎藤さんと箱根にて昭和62年5月

60年経った今では教育の程度も向上してそんな事はありませんが、当時は日常茶飯事でしたが懐かしい思い出です。

現在は高砂通りの家もすっかり取り壊し、とても立派な建物に変わってしまい、昔の面影は有りませんでした。まだまだ懐かしい思い出の沢山ある場所です。



現在の高砂通り13番地角から見た通り



建て直された現在の13番地元官舎跡 平成17年6月撮影

酒保係り任命

19年5月頃の或る日、課長に湯浅中尉と呼ばれ何事かなと恐る恐る行くと、課長から今まで約700人の民政部職員の日常生活用品は時々経理部や物資配給組合より、配給される酒保物品を主計課で配って居ったが、それでは不完全なので、この度専従の酒保係りを設け、それに専念させて業務を充実させると言われました。それで責任専任部員を湯浅中尉に、専任酒保係りを栗竹にアシスタントとして、ヨッピーを任命すると言われました。

これは湯浅中尉の提案で着任当初から私にやらせようと考えて居られたらしく、やっとな私にも責任の或る仕事が回って来ました。

酒保と言えば商店でいくら私が魚屋の倅でも実家は仲買で住まいと店は離れて居り、第一魚の名前も判らないような育ちで、商いなどでんで判らないし経験もないでしょうと思っただけで思案を致しましたが、やはり蛙の子は蛙とか商人の血が騒ぎ始めたのでしょうか、だんだんとやる気になりまして、いつのまにか仕事も順調に動くようになりました。

先ず湯浅中尉が私を引き連れ経理部、軍需部、物資配給組合など挨拶に行き、台湾銀行に専門の口座を設け、商工課その他物に関係のある部署や商社など、隈なく回り挨拶を致しました。

酒保の倉庫を整備致しカウンターや棚など作り、その間にヨッピーに各課の正確な人員の把握と地方分県の数などの書類を整備させ、又政務部8課経済部7課の庶務係りに酒保物品受領担当者を定める様に頼み、ヨッピーはとても迅速にテキパキと処理居たし素晴らしい才能を発揮しましたが、少なからず藤野さんの援助のお陰と思っただけです。

就任に際して課長より任務に付いては、皆が欲しい品物を常に扱うのだから、不正のない様に清廉潔白で皆から後ろ指を指されるような行為を慎み、全て公平な仕事を期待していると訓示を受けました。この事は固く守り、皆より融通の利かない奴だと悪口を言われ続けました。

湯浅中尉と相談致しまして、現行は配給原価に近い価格で配給してましたが、酒保独自の資金調達のために、今度から品物により20%から30%のマージンを乗せる様に致しました。商業学校卒業の為に簿記は得意で金銭関係と物品仕入れ販売の及び商品管理、在庫帳簿は完璧な出来でした。

今までは配給されるのを待っていたのが、今度は毎日歩いて先方に行くといくらでも欲しい品物があり、お菓子や化粧品関係その他諸々な雑貨が集まりまして、今までは時たまの配給でしたが、今では隔日当たりの店開きになり大忙しに成りました。

酒、タバコ、石鹼、ちり紙、などの日用品は原価販売でしたが、その他の物も種類が増え、余剰利益金もどんどんと増え続き、資金も潤沢に成り、街に有る商店からも品物を仕入れる様に成りました。

司令部の主計部員だった湯浅さんの同期だった藤井中尉は特に湯浅、齋藤両中尉と仲が良く時折遊びに来て居りましたので、湯浅さんが司令部が接収したオランダの敵産物資を酒保に回すように頼み沢山の敵製物品を獲得致しました。ブランデー、コールゲートのパウダーや歯磨きLUXの石鹼など少し高いがとても喜ばれました。傑作は大きな頑丈な木箱に入った物で黄色い石鹼のような塊のようなもので何か判らずこれはきっと洗濯石鹼だと思ひ少し削って水で擦っても泡が立たず何かなと考へて居りましたら、ヨッピーが来まして「栗竹さんこれはチーズよ」と言われ如何に戦時中我々の食生活が貧しかったかをヨッピーに教へてしまいました、私も負けずに「だろうと思つたけど、余りにも味が不味いのでチーズじゃないと思つたよ」と言つて負け惜しみを致しました。

現地における日用品物資の生産も向上致し、潤沢に出まわるようになったので、現地採用のインドネシア職員にも酒保物品の配給を始めました。この件は全てヨッピーに任せ、品物は集めるが配給は一任致しましたら、皆とても喜び進んでヨッピーの手伝いを買つて出る者もあり大成功でした。

やはり原住民は生活物資には困つて居たから他の役所の職員から羨望の眼差しで見られたとの事でした。



現在の民政部正門跡 門は塀になって閉ざされてる

酒保の仕事の想いで 「播秦建公司」

何時もお世話に成っている物配のお名前は失念致しましたが、物資配給課長の商社の方が「栗竹さんどうしても欲しい品物が有る時は華僑の店に行けば大概ありますよ」と海岸通りの「播秦建公司」(字がはっきりと覚えて居ないが)に紹介状を書いて、電話を入れて何時行けば良いかと手配して下さいました。行きましたら商店ではなく小さな普通の家で、門の所に播秦建公司与額が掛かつて居るだけでした。来意を告げると中に招じられ入ったらその家の大きい事、何処にこんな場所が有ったのかと驚くばかりで、その内年配の番頭さんらしい支配人の方が出てきて、愛想良く迎え入れ応対して呉れまして紹介状を出しましたら「電話でお話は聞いて居ります、欲しい物が有れば何でも値段さえ折り合えば捜して上げます。」と言われ、今日は挨拶に来ただけだとおいとま致しました。彼から見たら私などこの小僧がと思われたでしょうが、役所に帰りもう既に大尉に昇進致しました湯浅大尉にこの事を報告致しましたら、良く話を聞いて下さり「余り深入りしないで上手に付き合う様に」と言われ一任されました。

後日又行きますと私が気に入ったのか、とても親切に色々アドバイスを下さり、仲間の華僑の店やインド人やアラブ人の店を紹介して、一緒に同行して下さい、それぞれの店主に「この人に安く便宜を計らうように」と口添えをして呉れました。

これは日頃課長が良く言われて居る「現地の人にも礼儀を正し、決して占領者のような相手を見下す態度を慎むように」との教えを守り、相手に年長の礼を示したのが気に入られたらしく、その後親しく世間話などもできるようになりました。

然し値段の交渉には納得する値段からは一步も譲らず絶対に妥協致しませんでした。折り合わなければ交渉決裂で断じて引きませんでした。

アラブ、インド系は特に駆引きが強く、最後には相手が根負けして妥協してきました。これはやはり駆引きの強い魚河岸、で永年商売をしてきた父親の血を受け継いだのではないかと今になって納得して居ります。課長が私を酒保係りに任命したのはその事を考慮したのでしょうか。この駆引きの強さが評判になりアワタケと発音がしにくいのか何処に行ってもトアン酒保とかトアン、カチャマタ（眼鏡さん）と呼ばれるように成りました。

何処の店もそれらしい商品は余り店頭になく、殆どが見本の取引で一つの取引が成立するまでは結構時間が掛かりましたが、同じ品物なら何店かの値段を調べ、簡単な市場調査を致しまして値段の目安を決めてから湯浅大尉に報告を致し、買い入れの許可を受けまして行動に移りましたが、湯浅さんも段々と仕事の量が増えまして忙しくなり、私を信頼してまかせてくれるように成りました。

昭和20年に入り司令部からの接收物資も段々品薄になり、入荷もなくなり在庫のみになりましたが、あれには本当に儲けさせて貰いました。

司令部も全軍に支給するには数が少なく、半端物で処分に困って居りました品物なので、値段も当方の言値次第で安く入り、LUXの石鹼などは現地製と同値ぐらいなので、配給値段は何倍にもなり、物凄い利益が上がり酒保の運用基金も莫大な金額になりました。資金が有るのだから少しぐらい高い闇物資もどんどん買って原価の30%ぐらいの値段で配給して喜ばれました。

当時皆さんタバコを吸う方はライターを使って居りましたが、このライターの石が店頭になくなりまして不自由をして居りまして酒保で探してくれとの要望が多く、湯浅さんが私に探すように命じました。私も街に出まして探しましたが、何処の店でも有りませんでした物が全然無くて不思議な現象だと思いましたが、致し方なく播秦建公司の支配人に相談致しましたら「いま街には全然有りませんが、持っている所を知っているから探して上げる」と言って呉れました。

後日連絡が有りましてで行きましたら一個70セントだと云われ、飛び上がらんばかりに驚きました。なんぼ何でも今まで高くても5セント位の物が70セントとは目茶目茶だと言いましたら「もう絶対に入らないのだから致し方ない、どうしても欲しいのならばそれで買わなければ手に入らない」と言われました。

私は「何個有るのだ、」と云ったら「3000個だ」との事で、帰り湯浅さんに報告したら「70セントは目茶目茶な値段だが、藤井大尉がライターの石を探しているから、買ったなら司令部に分けてやろう」と言われ、「任せるから出きるだけ安く買って来い、この事は課長には報告しないで全部俺が責任を持つからやってみろ」と発破を掛けられて、私も余りにも莫大な金額の大きい取引なので、少し怖気がつきましたが資金は有るし、湯浅さんが責任を持つと言うからと気を大きく播秦建公司の支配人の所に行きまして「全部で幾つあるのだ、値段によっては全部購入してもよいから」と云うと「全部かき集めても5000個だ、栗竹さんとは親しい付き合いだが、全部この店の物なら相談に乗るが何人かの集め物なので、全部幾らで買って呉れるか?」「5000個全部で1500ルピアといったら笑い出し「幾ら何でもそれは無理です」「ではこの話は無かった事に私も民政部の皆さんにライターの石1個70セントとは云えない」と足を抜いて帰りました、湯浅さんもそれは無理だろうと言っていました暫くして連絡があり、お会い致したいと言ってきました。私はそれ来たと思って居りましたが、欲しい顔はしないで石の話題には触れませんでした。

先方も世間話などして居りましたが、私が知らん顔しているので遂に「所で先日の石皆で相談して栗竹さんだから特別1個50セントまで致します」と云うので「私も考えて見ましたがやはり50セントは買えない、35セントまで譲歩致しましょう」と言って帰ってきました。湯浅さんは「50セントは仕方ないかな」と言っていました、私が反対したので「まあ余り無理をしない様に頑張れよ」と後は一任してくれました。

その後1週間ぐらい何とも言ってこないの、これはやはり駄目で虻、蜂取らずに成ってしまったかと心配して居りましたら、会いたいからと言って来ましたので、未だ脈は有

るかなと出かけて見ましたら、支配人が「栗竹さんには負けました、40セントで如何でしょう」と云ったので、私も最初の見積もりなので安心致しまして「私としては不本意なのですが、今までトアンには随分お世話に成っているので40セントで手を打ちましょう」と3週間位掛かってやっと大きな商談が成立致しました。

月給が手取り30ルピアそこそこの時2000ルピアの取引は大変で、今の金額なら莫大な取引でした。

支配人は後で「栗竹さんは若いけどもう立派な一人前の商人ですね」と言われ誉めているのかな？嫌な奴と思ったのかな？と変な気持ちになりました。

その間司令部ではもうマカッサルの石は全部民政部が買い占めたとも知らず必死になってライターの石を探して居りました。

何故司令部が懸命に成って探していたかと言うと、館砲化兵専修の小林少尉が昭和19年秋にセレバス23特根に転勤してきてから、現地にて応急兵器の製造を始め手留弾や鎗弾筒等の製作の為黒色火薬発火装置にライターの原理を利用するので、石を探して居りまして、担当の**国分大尉**が街中を探して居りました。湯浅大尉より藤井大尉が石が入ったと聞いて飛んできて「有るだけ貰うから」と言うので酒保で必要なだけ取って後、全部司令部に回しました。

藤井大尉が「栗竹幾らだ」と言うので「言値は70セントでした」と云ったら全然高いとも云わず「そうか後で払うから」と云われたので「藤井大尉待ってください、今酒保にはお金は沢山ありますが物が有りません。お金でなく物で下さい」と約4000個分2800ルピア分の商品引き換え証書を書いて貰いました。

石だけで1200ルピアの儲けになり皆さんには1個5セントで配給いたし、どうせ司令部からはどんな物が来るか判らないので、儲けの分は保険だと想い、博打を打った気持ちでした。

湯浅大尉も「良くやったな」と誉めて課長に報告してくれました。課長は「やっぱり魚問屋の倅だね、やる事そつがないね」と云って居られました。然し2000ルピアの大金の大取引なので湯浅さんもとても心配だったとの事でした。

後日スラバヤから着いた司令部からの品物は、全部接收品や街で仕入れた雑貨ばかりで中にはタオル地のポロシャツなんかもあり傑作は女子のパンティで当時珍しいヒラヒラのレースの着いた踊り子さんが穿くような、私なんか見るだけで顔が赤くなるような物もあり、パンティの配給は藤野さんに任せました。

後で聞きましたらとても大きく手を加えなければ穿けないとの事でどの様にするの？と聞いたら「そんなこと聞く人が居ますかバカ」と叱られました。

珍しい物も沢山有りましたが何分仕入れ原価が高く随分安く皆さんに配りましたが、結局ライター石の儲けを全部吐き出し尚赤字が大きく出ました。

道理で藤井大尉が言値の70セントで引き取ったと思いましたが、皆さんに変わった物を供給できて良かったと思います。特に大量のブランドーは酒の少なくなった時代ですからとても喜ばれ、料亭などからも分けて欲しいと問い合わせが来ましたが、湯浅さんは断って居られました。

段々と品物も街から消えて物探しに苦労するようになり、主計課主幹のシロップ工場に行って分けてもらったり、経理部のお菓子工場に行き、瓦煎餅のようなタピオカ粉の焼いた美味しいお菓子など分けてもらい配りました。

20年5月頃には決まった日用品の配給しかなくなり、街に出て物が見当たらず成ったので時たまの配給の仕事もヨピーに任せ、私は遊軍として湯浅大尉の仕事を手伝う事が多くなりました。

この頃より戦局の逼迫によりいよいよマカッサルも敵の侵攻の目標になり、マリノに要塞を築き戦略物資の集積を始めました。

湯浅さんが主に其の任務に付き、私もお手伝いを致しカチャンミニャ（落花生油）など街に無くなった物など随分播会社に頼んで莫大な価格で集めて貰い随分と儲けさせました。彼はもう日本の敗戦を見越して居ったのか、足元を見透かして高値を言って来ましたが、

背に腹は変えられず目を瞑って言値で買いました。

其の物資も戦後マリンプンに搬送して我々抑留中の食べ物になったのですから、厳しい情勢下で食に恵まれたのも播公司のお陰もあると思っておりますが、金の為には食欲な華僑の逞しさに脱帽いたしました。

終戦後聞いたのですが私の事可愛がって面倒を見てくれた方は播家の三男か四男の息子さんだったと知りました。

1976年にマカッサルに再訪致しました時、播家の消息を尋ねましたらイ政府の華僑排斥事件の時に長男は殺され家族は消息不明との事で、今では播秦建公司の名も知らない人が多いと聞きましたが、あの逞しい一家のことですから、きっと今ごろは何処かで大会社に発展して居る事でしょう。

勤務中には色々な面白い失敗も有りました。戦局が悪くなりまして時折ニューギニアやハルマヘラ方面よりの転戦部隊がマカッサルに多くなりました。

各部隊とも丸裸同然で来るので到着後直ちに日用品に不自由致しますので、或る時司令部の藤井大尉より、湯浅大尉に転戦の陸軍部隊が品物に不自由しているが、司令部では手が回らないから手伝って呉れと依頼があり、程なくして陸軍の若い主計少尉が湯浅大尉の所に日用品の手配の依頼に見えました。

湯浅大尉も忙しいので私に対応を命じ、欲しい物のリストを作りましてお届けすると約束致し、私は直ちに経理部や物配に行きまして、配給の手配書を貰い各工場や倉庫など駆けずりまして軽トラック一杯の品物を揃えましてマカッサル郊外の仮兵舎にと届に行きました。

兵舎に着きまして「民政部の栗竹と申しますが〇〇少尉をお願いします」と衛兵所に言いましたら、中から衛兵下士の確か軍曹か曹長だと思っておりますが「貴様軍属のくせに〇〇少尉とは何事か、〇〇少尉殿と申し上げろ」と物凄い剣幕で怒鳴られ、追い返されてほうほうの態で逃げ帰って来ました。

私と致しましては折角一生懸命集めて上げ届に行ったら怒鳴られて帰されたので、腹の虫が納まらず湯浅大尉にこの様な訳でと報告したら、笑い出し海軍は官位、官名、役名の全てが敬称と成り呼び捨てで良いが陸軍はそれに閣下、殿などの敬称を付けるために理事生の私が高等官の少尉を呼び捨てにしたので怒ったのだと、結局海軍と陸軍の敬称の違いが誤解を生んだのだと判り納得致しました。

電話を受けて若い少尉はすっ飛んで来て湯浅さんと私に平謝りに部下の無礼を詫びましたが、私も気分良く少尉と一緒に行きまして、今度は捧げ銃で迎えに来て髭面の下士官が謝りに来たのは良い気分でした。

その少尉とはその後何回か物資を手配いたし仲良くなりまして、二度ばかり飲みに行きましたが無事武運を真っ当されたか判りません。

颯爽と街を走る

話は前後致しますが、酒保係りを任命致し外回りが多くなりまして、自転車では能率が上がらないので、湯浅さんが交通課の全車両を管理している田柳技師に頼んで、オートバイの支給を依頼してくれました。

最初のは小回りが利くほうが良いと50cc位のドイツ製のデー.カー.ウエイのバイクでした。これは自転車の様に何処へでも簡単にパタパタとガソリンも食わずとても便利に使いました。

その内パレパレから英国製のB.S.Wが来たからとこれは長く乗りました。調子は良いのですが、最初のキックが中々掛からず掛かれば力も有るし大分遠くまで行きました。

その後英国製のノートンが来たから栗竹に乗せてやるから酒を沢山集めて来いと、ノートンに乗る事に成りました。この車は当時珍しいフッドギアでとても重量感があり素敵な車で気に入ってましたが、民政府に課長のお使いで行った時空襲に遭いまして、爆弾が近

くに落ちまして壊れてしまいました。

最後は特別の計らいで現地召集されるまで念願のハレーに乗せてもらいました。これは憧れの車でお痩せの私が乗ると様にならなかったのですが、倒れそうに成るとまわりのネシアの人を呼んで助けて貰い、起こして貰う事もしばしばでした。

でも若いアンちゃんが防暑服に戦闘帽と、半長靴でマカッサルの町を颯爽と風を切ってハレーで走ると云う事は、今時の青年でも憧れるカッコ良さで、何とも云えない良い気分でした。

お酒は林兼商店が現地で合成酒を作って居り、また大日本油脂が石鹼の工場がそれぞれマロスに有りましたので、時折連絡に行きますと結構距離がありますのでとても暑く帰りにマロス橋の麓の木陰に竹筒に入ったバロウ（砂糖椰子の汁を醗酵させた椰子酒）を売って居るので、バイクを止め確か1本約1.5リットル位入っているのが15セント位と記憶しているのですが、この竹筒の回りに水滴があり、気化熱の為にヒンヤリと冷えた甘いサイダーのような飲み物が熱く火照った体に何とも云えない美味しさで、ゴクンゴクンと飲む其の美味さは今でも思い出します。

然し売って居るのは醗酵途中の言わばどぶろくの製造過程の甘酒の状態で、完全に醗酵すると結構アルコール分も高くなり、これを熱い体に入れ揺られて帰ると丁度30分くらい経つと酔いが回って来て、役所に到着した頃はほろ酔い機嫌で顔も赤くなり、フラフラと机に着くとヨピーが目ざとくそれを見つけ「栗竹さんバロウ飲んで来たでしょう、課長や湯浅さんに見つからない内に隠れなさい」と耳元で囁くので慌てて当直室のマンデー場で冷たい水を被り酒保に逃げ込んで酔いの覚めるまで待って、何食わぬ顔をして戻って来たのが懐かしく思い出されます。

又雨季になると時折スコールが来ますが、向こうの雨は塊で降るので道路を挟んで手前は降っているがあちらは濡れていないと云う現象も良くあり、バイクで走っていると雨が後ろから追っかけて来て懸命に成って逃げて役所に走りこみ、危うくセーフの場合も時たまありまして「今日は何匹蛙を轢いた」と雨で道路に出てくる沢山の蛙を殺してしまった事も有りました。

7人の新任理事生の中で私と中村氏だけは外回りで、後は内勤なので二人は本当に愉快的な気分街を駆けずり回りました。マンゴーの並木道やブーゲンビリアの咲く緑の街並みなど駆け巡り、今思い出しても楽しい青春時代でした。

戦時中と同じマカッサルの街並み (1976年8月撮影)



海岸通りから元民政府方面に向かって



司令部前通り マロスへ



元民政府 現国立銀行



三笠会館前より海岸通りに向かって



元大和ホテル 現在グランドホテル

野戦隊 Anggota Pengiaga Api (消防隊)

たしか20年3月頃からだと思うのですが、戦局も切迫してきて敵はハルマヘラまで攻めて来ました。今度はセレベスだと覚悟を決め緊迫した空気が漂ってきた頃、マカッサル防衛の為に軍属、一般邦人の方々が多く現地召集されまして軍籍に入り、スングミナハサの兵舎に入隊致しました。

残った者は野戦隊という防衛隊を組織いたし、隊長は課長の小笠原少佐で斎藤、湯浅両大尉が幹部指揮官として組織が編成されました。

隊員は訓練を受け空襲の時などは各定められた警戒配置に着きました。5月頃より空襲も激しくなり私は皆と爆撃後の整理などに駆り出されスングミナハサの経理部の縫製工場の爆撃の時は、瞬発爆弾が沢山の若い女工さんの働いて居る所に落ちたので、その状況は凄惨を極め頭、手足、胴体とばらばらになった数多くの死体が散乱しているのをトラックに人数の確認の為にそれぞれ1組に集め積み込みまして、ロッテルダム前のプールに運びまして、トラックが何回も往復致しまして、私たちも疲れはて最初は軍手をしていたのですが、それも血と油のためにヌルヌルになり異様な死臭の為に気持ち悪くなり、日も暮れて暗くなり死体は未だ残って居るのにトラックは来なくなり、三人で番をしてましたがその恐ろしい事、未だに思い出してはうなされることがあります。

遂に真っ暗闇になりまして我慢しきれず駆け出してマカッサルまでかなりの距離が有ったと思うのですが夢中で帰ってきました。

帰ったら皆マンデーを終わり談笑して居りましたので「酷いじゃないか、置いてけ堀にして」と怒りますと「運転手がもう終わりだと云った」と云うので喧嘩にならず、幾ら体を洗っても匂いが抜けず、食欲もなく疲れはてて寝ましたがうなされまして、当分怖い夢を見ました。

其のうち同じ主計課の佐伯囑託と二人は Anggota Pendjaga Api (消防隊) に配属になりました。これはインドネシア語の堪能な佐伯さんとバイクを持ち機動力に富んだ私を野戦隊と消防署との連絡に当たらせる為で、当時消防署は街外れの浄水場にあり、消防車は確か3台あったと思います。署長は市役所の水道課の技師でお名前は失念居たしましたが杉本か杉山さんか杉の付く方だと記憶して居ります。

隊員は本職の消防士でとても勇敢な人達で、すぐに仲良くなり酒保から簿外のタバコなど沢山持って行って喜ばれました。

課長は「栗竹は火事と喧嘩が大好きな深川ッ子だから適任だ」と湯浅さんと話して居られたそうです。お言葉の通り出動命令が出ると嬉々としてサイレンを鳴らし走る消防車の後をバイクで追いかけて其の経過を本部に連絡致し次ぎの指令を伝えました。

20年5月の大空襲の時海岸の軍需部の倉庫とチャイナタウンが大打撃を受けました。その時のことは忘れられません。倉庫には近く前線に送る戦略物資が満載されて居りました。恐らく敵の諜報機関の通報により解かって居ったのででしょう、完全にやられ米や多くの食料燃料弾薬など貴重な物資が目前で焼かれました。

消防隊員達は少しでも助けようと思い懸命になって水をかけました。私も消防車の傍でホースを伸ばしたり一生懸命やりましたが、其のうち倉庫のドラム缶のオイルに火が入り廻りから熱せられたドラム缶がブルブルと震えだし膨張して爆発すると中の油が裂け目より天高く吹き上げ100M位まで火の幕が燃え上がり、まるで花火の様でそれが次々と爆発致し、消火の水を取る為に岸壁の先に消防車を設置致しましたので廻りを火で囲まれ、倉庫も崩れ始めましたので致し方なく持ち場を捨てて撤退する事に成り、隊員と海に飛び込み対岸まで泳いで逃げました。幸いに引き潮だったので早く岸壁から離れることが出来まして、隊長は流れてきた流木に綱を結び全員を集めて綱を離さないように指示致し、私を木に結び付けまして約1時間位過ぎたでしょうか対岸に泳ぎつきました。

間もなく消防車の有りました岸壁の倉庫も焼け落ちまして危うく命拾いをいたしました。その時私は第3分隊で3番目の消防車でしたが名前は忘れましたが通称 TAICYOU と呼ばれた隊長がブギス族の人でしたが、とても勇敢で信頼の置ける人で彼のお陰で私達が助か

ったと思って居ります。

他の2台の消防車は外の所に配置してあったのでそこまでたどり着きますと、皆もう我々が駄目だと思ったらしく全員7名の無事を喜んで呉れました。然し貴重な消防車やヘルメット、防火コートなどを失い、当初の判断ミスは悔やまれました。明け方グシャグシャの惨めな格好で宿舎に帰りますと、課長以下皆さんで「もう駄目かと思った」と無事を喜んで下さいました。

翌日焼跡の中華街に行ってみると、播秦建公司の屋敷跡など跡形なく焼け野原となって居りまして、皆さん安否は判りませんでした。後日聞いた所によると、彼らは1週間ほど前に避難したようで、もう早くから情報が判っていたのかもしれませんが、今思うと物配の課長と公司の長老に昼食をご馳走になったとき、部屋の中に重慶政府の蒋介石からの献金の感謝状が飾って有り驚いて聞きますと「私は華僑だから中国にも日本にも協力している」と威張ってました。

播一家の先祖は元来セレベス海マカッサル海峡からモルッカ諸島小スンダ列島を股に掛けた海賊の大親分だそうで当時は南セレベス各地に産物の集荷販売の巨大なネットワークを持つ経済界の陰の大物でした。ですから我々のことは全部お見通しで、ライターの石を海軍が探しているなんて情報は早くから判っていて、マカッサル中の石を1セントか2セント位で買占め目茶目茶な値段で大儲けをしたので、流石華僑のやる事は恐ろしいと思いいい勉強になりました。

後で聞いた話ですが戦前は沢山流通していたオランダの金貨や銀貨が、日本軍が駐留してから街の中から消えてしまいました。ヨピーに聞いたら以前は銀貨を使用していたのに軍票が出たら全然消えたと云ってましたが、戦後ゾロゾロと出てきましたのは、華僑がドラム缶の中なぞに入れて地中に埋めて置いたのだと聞かされました。

余談になりましたが彼らの底力の偉大さに敬服致しました。

マカッサルのレジャーと訓練



世界3大サンセットの一つと言われているマカッサル、ロザリオ海岸の夕陽

19年6、7月頃のマカッサルはそれは天国でした。空襲もなく毎日夕方になると課長以下皆で自転車に乗って、世界3大サンセットの美しいロザリオ海岸に落日を見に行きました。太陽が落ちると夕闇の中に所どころに有るラジオ塔から甘いクロンチョンのメロディが流れ涼しいそよ風に吹かれながら家路に帰るのは戦争を忘れるような素敵な気分でした。

また休みの日は皆でロッテルダムの前
のプールに行き良く泳ぎました、帰りに
喫茶店の二幸や清月堂に寄りまして甘い
物を食べるのがとても楽しみでした。

また三笠会館では映画や催し物が良く
あり、内地からの芸能慰問団の公演や音
楽の夕べなど楽しみにして居りました。

藤山一郎さんにインドネシアの歌謡指
導を受け国歌の「インドネシア、ラヤ」
や「ブンガワンソロ」などを教えて戴き
ましたのも三笠会館でした。

南星座にも良く映画を見に行きましたが、現地の人と一緒に良く南京虫に食われ席には座らない様に立って見ておりました。

休日には色々なスポーツの大会もあり、バトミントンやテニス、卓球などの大会もやりまして湯浅さんの指示で酒保より賞品など提供して会を盛り上げました。

卓球では藤野さんはとても強く男子選手をバタバタと負かし、賞品のビールなどを取ってきて応援の我々に飲ませて呉れました。

自転車の遠乗りも楽しい思い出で、皆でスングミナハサやマロスの方まで行きまして帰りに中華料理を食べるのが最大の楽しみでした。

然しこの様な優雅な生活も20年に入ると空襲も始まり、そんな暢気なことはしていられなくなり、休みには軍刀術などの実戦的な訓練が始まりました。

或時斎藤甲板士官が我々若い理事生達のストレスを発散させる為に、収穫済みのバナナ畑を買いきりまして思う存分軍刀で切りまわしました。太い幹を袈裟切りにバサリと切るのはとても良い気分、調子に乗ってバッサバッサと切りまくり、人間もこの様に切れるのかと良い気分になりましたが、帰宅後刀の手入れを怠るとバナナのアクで刀身がベトベ



スングミナハサの鉄橋 (現在は新しくなって居る)

トに錆付いて、刀が抜けなくなり大騒ぎになりました。私はいち早く刀身を石鹼で洗い打ち粉を打ったので事無きを得ましたが、其のままにした者は後で大騒ぎに成りました。

軍刀術では剣道有段者の斎藤大尉に仕込まれましたが、なかなか大変な修行で、あの重たい刀で素振りを行う時、振り落とした刀を止めるのが至難の技で、10回もやれば腕は痛くなり息も切れるし、一度振り落とした重みを止められずそのまま穿いていた半長靴の先に、切っ先が刺さりもう少しで足の指を切ってしまう所でした。

昔の戦国時代の武将がああ刀を振り回したのは余程の力持ちだったのでしょうか、今でもテレビの時代物を見ると刀を振り回しバツバツと人を切る場面など、空空しく白けた気分で見えます。

20年3月頃セレベス新聞(毎日系)でネシア青年の為に、滑空機を内地より取り寄せたのを、マルチャヤ広場で師範学校の生徒に教えて居りました。当初航空隊の若い士官を教官としてやって居りましたが、前線出動の為に教官を探して居まして**山田教員**が滑空士免状を持っていたので誰か助手をと探しておりました時、課長がそれを聞きまして「うちの栗竹が資格を持て居る」と云われ私に金、土の午後に行く様にとの指示が有りました。

山田教員と会うと「教えたくも教典も何も無い」と云うので私が何かの役に立つかと「中等学校滑空士訓練要綱」と云う教典を持っていたのでとても喜び「これで訓練が出来ます」と言われたので、私はそれからヨピーの協力を求め、残業をして教典をインドネシア語に翻訳を致しました。

丁度も滑空機も文部省型1号と云うプライマリー(初級機)の新しい型の機だったので、教典がそのまま使え簡単でした。ヨピーは物凄い才能を発揮して私が読むのをタイプで翻訳しながら打ち、3日程で大体の教典が出来上がり、早速ガリ版で刷りまして皆に配りました。

号令は全部日本語で元より秀才ばかり集まって居る生徒達ですから、たちまち上達してその進歩は素晴らしいものでした。

生徒達は私と年は変わらないのに私の事「教官、教官」と呼び「ハイ、ハイ」ととても教えを良く守りました。空襲も激しくなり訓練も段々出来なくなって行きまして、遂に師範学校がワタンポネに疎開する事になり、この訓練は中断致したのは誠に残念でした。

この事ではとても奇遇な事があり、2001年に戦友会の**宮本さん**のお誘いで、元ハサヌジン大学の学長で現イラン大使の**バスリ閣下**のご子息の結婚式に御招待を受けて、絢爛豪華なブギス族の3日間に渡る式に参列致した時、初日のバッチンの式の時にバスリ閣下のお父様か奥さまのお父様が良く判りませんでした。私と同年輩の方が私の顔をしげしげと見て「昔何処かで見た人と良く似ている」といわれ色々話を聞いてみると、マカッサル師範学校の卒業生で在学中にグライダーの訓練を受けたと云われ、私も一緒にやったと云ったら「矢張りあの時の教官だ」と60年ぶりの再会で本当に奇遇でしたが、奇跡的再会に驚き昔話に華が咲きました、確か7、8回位しか訓練は一緒にやらなかったと思うのですが懐かしい思い出になりました。

現地召集、スングミナハサ兵舎入隊

20年5月頃より始まった現地召集も1次、2次、と続き回数が増えて行き同僚が次々と召集されて行きました。

民政部では各宿舎に分散して居りました理事生たちを、鎌倉通りと高砂通りの角の宿舎に集合させて、男子宿舎として合宿させました。其の頃マカッサル研究所がスラバヤに移転いたし、多く職員達が民政部に統合されて役所に来ました。主計課にも多数入りまして新しい友人が増えました。

男子宿舎での生活は仮住まいのような次第でしたが、皆で遊びに行ったりバドミントンをしたり楽しかったです。

然し段々と召集されまして人数も少なくなり、女子理事生達も地方に疎開して最小限度の要員だけマカッサルに残り寂しくなりました。斎藤大尉も司令部の傘下に入り、ワタンポネ派遣隊長としてボネに赴任致しました。(この件は後で聞きました)

酒保の仕事も殆ど開店休業でたまの配給もヨピーに任せ、もっぱらマリノに物資を運ぶ仕事に関わりました。

民政部も遂に各進出商社の戦時下事業接収に踏み切り、政務部長を本部長として小笠原課長や湯浅大尉などが中心となり大事業が始まりました。

7月下旬に遂に私にも召集令が来ました。第5次の召集で8月1日に入隊の事でした。

それからはヨピーと酒保の残務整理で忙しい毎を送り、酒保の残品の整理や資産の整理で大変でしたが、未だ配給は来るので幾許かの資金を残し、残りは臨時軍事費に納入致し後はヨピーに頼みました。

ヨピーは別れの時私にお祖母さんの形見のウイヘルミナ女王の金貨を呉れまして「万が一の時に役立てて」と涙を流して無事を祈って呉れました。この金貨はマリンプンから引揚げの際貴金属の携帯は厳罰との事で、石鹼に埋めこみましてマリンプンに埋めて来ましたが、本当にヨピーに済まないことを致したと今でも悔やまれます。



私もヨピーに兄から貰った洋服地や入隊に不要な物 男子理事生が合宿した鎌倉通り角の男子宿舎など数多くの私物を上げましたが、物が無くなっていた時なのでとても喜びました。ヨピーの大事な宝物を貰い全財産を上げて足りないと思い感謝致して居ります。

8月1日に入隊致しますと、もう殆ど若い者は居らず40才以上の人が多く、私の分隊約20名の内、銃を使った教練を行った者は私と工作隊から来た22才の二人だけで、後は初めて銃を握ったと言う人ばかりで、分隊長は予備役の下士官で、班長は大陸で戦った歴戦の勇士で体一杯にクリカラモンモンの刺青をしたやくざの親分みたいな人で、この人が威張って分隊を仕切って居りました。

訓練の時は若手二人が中心になり全てをやりました。この若い二人が親分に可愛がられ「アワさん、ナカさん」と古参兵並みの待遇で飯上げ掃除など一切の内務班の仕事などしないで、下にも置かない待遇で上座に座り、ご飯やおかずの盛りも良く最高に良い気分でした。

洗濯は課長の所のジョンゴスが毎日自転車で取りに来て塀の所で「トアン栗竹」と呼ぶので行くと、袋に入れた洗濯物と菓子、果物など持って来てくれました。私はその時はもう止めて吸いませんでしたが、タバコなど有り皆に上げるととても喜ばれ益々顔が良くなりました。

後で聞きましたら皆湯浅さんの指図でやって呉れたとの事有りがた涙が出ました。

訓練は人一倍やりましたがそれ以外は何もやらないので居心地が良く、皆とてもこぼして居りましたが入営中は天国でした。

訓練も10日経ちまして朝礼の時「栗竹二等兵」と呼び出され、何も悪い事してないのに何事かなと思って前に出ますと「ワタンポネ派遣隊勤務を命づ、直ちに出向せよ」と思もよらない辞令が出ました。

早速に皆に別れを言いまして、荷物を纏めマカッサル行きの交通車に乗りまして、直ぐ役所に行きますと皆驚いてどうしたのと聞きました。

当時一課長を(総務課長)兼務して居りました小笠原課長のところに行き、軍隊式に申告を致しましたらニコニコして「斎藤が呼んだんだ、ボネで新しい仕事があるから一生懸命やりなさい」と云われました。

湯浅大尉は「お前が入隊する時から斎藤と藤井が話をして決まって居たことだから、期待を裏切らない様に頑張りなさい」と言われ何事かなと、半分期待を半分は不安の気持ちでその晩は課長の官舎に泊まり、翌日主計課の皆さんに別れを言って巧い具合にワタンポネに行く車に便乗してボネに旅立ちました。

出発の時主計課の皆さんがヨピーと二人きりにさせ様と気を遣いましたが、ヨピーが照れてわざと私を避ける様にしていたのが思い出されます。遂に彼女は声も掛けずに去って行きましたが、後で課長があの時ヨピーは涙を隠して居たよと聞かされ、たった一年半位の付き合いなのに恋とか愛とか言うのとは違う、深い友情で結ばれていたのだと思います。

戦後何度かアンボンに居るヨピーの所に手紙を出しましたが、音信不通のまままで今日に至りました。

ワタンポネ派遣隊

8月12日ベンゴ一峠、ネンゴ一峠を越えましてワタンポネに到着致しました。ワタンポネは南セレベスでも一番の親日家のポネの酋長のお膝元で、気候が良く農作物に恵まれ、海にも面して海産物も豊富で、人心も穏やかで住民達も親日的で協力的な我々の第一の身方でした。



民政部は早くよりこの土地を民政部の疎開地と定め 渡部さん 山形にて 93年3月写
状況が悪化し敵が侵攻してきてもこの地ならば生き残れると思い、早くより手を打って大物の地方課長の**高橋司政官**を県監理官として送りこみ、首長家との折衝に当たらせ敏腕の**渡部警部**を分県監理官として人心の掌握に努め、大尉クラスの大物の派遣隊長を置きまして大いに王家との親睦に務めました。

民政部は既に王家の広大な所有地に疎開職員の宿舍の建設の青写真が出来て居り、さらに土木課の技師達職員は現地入りを済ませ準備段階に入って居ました。

斎藤大尉は私にその建設の仕事の一端をさせ様と、高橋監理官や渡部監理官に進言してこの結果になったと言いました。

派遣隊に到着致しますと、斎藤大尉がニコニコして「ご苦労さん待つて居たよ」と迎えて呉れました。派遣隊には最初から居た隊長の准士官が居て前任下士官以下兵曹、上等水兵一等水兵など歴戦の勇士が居て、私は最下位の二等兵だし誠に居心地が悪く然も隊長は後から乗り込んで来た兵科で無く主計科士官で、そのお声掛かりの私としては座る場所も無くウロウロとして居りましたら、皆さん親切にまるで特別の民間人扱いで受け入れてくれました。その外に約20名位の兵補（インドネシア人の兵隊）が居りました。

食事の時も先任の兵長がお給仕してくれるので私がやろうとすると「良いから座っていなさい」とお客扱いで呼ぶ時も隊長や兵曹長の前では「栗竹」と言いますが、そうでない時は「栗竹さん、栗竹さん」と呼ぶので本当に困りました。

翌日斎藤派遣隊長に連れられて監理官事務所に挨拶に行きましたら顔見知りの四課長だった高橋監理官が「良く来たねご苦労さん」と迎えて呉れました。そしたらマランでお世話に成った大田原書記が秘書官として居られましたので、驚いて再会を喜び宜しくとご挨拶致しました。その後分県監理官事務所に行きまして渡部警部にご挨拶致しました。

初対面でしたがとても豪快な柔道で鍛えた如何にも警察官らしい怖い感じの人でしたが、話すとても優しく山形弁でニコニコと「明日から教える事が沢山有るからコントロール（事務所）に来る様に」と言われました。

派遣隊では何をすれば良いのやらウロウロとして居りましたが、何か手を出すと皆さんが「良いから、良いから」とさせて呉れないので弱りましたが、それならばと渡部さんの所に行きまして、ブギス族の習慣や首長王家のことなど教わりました。また簡単なブギス語など教わり、出来るだけ土語で話し早く土地に馴染むようにと教えられました。

渡部さんは日常サロンとバジュウとソンコのブギス族の服装をして役所に勤め、インドネシア語がとても流暢で特に土語のブギス語もとても堪能で、職員と話すのは全部ブギス語で話すので現地の人々の信頼も非常に高く人気がありました。

終戦後の抑留地のマリンプンでも同じ宿舍でとても可愛がって戴きました。帰国後は山

形県警本部長を務め、その後お寺の住職として仏門に使えた人格者です。

ワタンボネ病院の院長は八課長（衛生課長）の松井司政官が居られ、看護婦長に阿部さんなど顔見知りが大勢居りました。特に教員の田崎和子さんが居たのはとても心強く後に田崎さんとボネ県下各村村を回ったのは良い思い出に成りました。



派遣隊にもやっと馴れた3日目に「ボネ在住の日本人は派遣隊電信所に集まる様に」との指示に皆近くの電信所に集まりましたら、「これから

重大放送があるから」と言われ何事かと思いき聞き耳を立てますと、ガヤガヤと雑音が聞こえ内容は良く聞き取れなかったが、前にいた陸軍の将校が嗚咽を堪えて居ったので、これはきっと戦争が終わったのかなと思って居たら、斎藤大尉が「只今終戦の大詔が報じられました。各自持ち場に帰り冷静沈着に行動する様に」との訓示がありまして、私は「嗚呼、遂に終わったか、これからどうなのかな」と案外冷静にして居りました。

その夜隊長は兵補以外の全員を集め「くれぐれも軽挙盲動を慎む様に」と訓示がありました。兵補たちは早くから情報が入って居たらしく、何時の間にか居なくなり Merdeka Merdika(独立だ独立の時が来た)と騒いで居りました。

16日からは司令部の指示により、武器の監理などの命令が次々と来て忙しく成りましたが、皆案外落ち着いて居て整理も終わるとする事が無いので、非番の者たちで武器庫から銃を持ち出し近くの湖に鴨撃ちに出かけたり、現地製のビンの爆雷を持って魚とりに行きました。

鴨撃ちは猟銃の他オランダのベルクマンと言う小型機関銃を持って行きましたが、ベルクマンは丸い弾倉に拳銃の弾くらいの大きさの弾を50発ほど弾帯に詰め、映画に出てくるアメリカのギャングの様に腰弾射撃でバラバラと空に向けて撃ちましたが、射程距離は200m位でちっとも当たりませんでした。直ぐに銃身が熱くなり続けて撃つと焼けて、良く火傷を致しました。

爆雷はタバコの火を付けて海に投げますと、海中で爆発致し魚が沢山浮いて来ますが直ぐに沈み、始め近くに居るネシアの人に飛び込んで捕って貰いますが、帰って料理して貰いますと身がフニャフニャで綿みたいで不味くて食べられませんでした。

そんな事をしている内に渡部さんからブラブラしているなら手伝いにこいと雑用を言い付き、滞在の日本人との連絡などの仕事を致しました。

その内民政部のボネの宿舎の建設がどんどん始まり、多数の土木課の皆さんや建設に従事する方々が増え始めました。8月末頃渡部さんと斎藤さんと3人で私の運転でボネ傘下の視察旅行に行き、各地の分県監理官の所に廻り建築資材の提供を依頼して回りました。

その間兵補たちが不穏の様子なので、隊長に武器の提出を迫ったり情勢が怪しくなったので、武器の監理を厳重にして弾薬だけ別の所に隠したり致しましたが、大体武器庫の中には日本軍の武器は97式重機関銃が一番大きく、99式小銃も隊員の数だけ無く後は全部オランダ製の戦利品でしたので、台帳も余り正確でなく私の勘繰りですが、多分戦利品の武器の殆どは兵補に渡したのでは無いかと思って居ります。一度斎藤さんに確かめて見ようと思って居りましたが遂にその機会は有りませんでした。

ワタンポネでの終戦

その内隊長より田崎教員と一緒にボネ県下を廻り、先に頼んだ宿舎の建築資材の提供の宣撫工作に行く命令が降りました。

一行は私、田崎さん、ワタンポネ病院の男性の薬剤師さん（お名前失念）と田崎さんの同僚で、中国系インドネシアの女の先生でフォードの小型車に先生と私3人でもう1台の小型トラックに薬剤師さんとネシアの運転手が荷物を満載して出発致しました。

監理官事務所より連絡が有りましたので、行くカンボン（村）では沢山の村人が集まっており、私がハーモニカを吹いて歌の上手な田崎さんが日本の歌やインドネシアの歌を歌い、集まった子供達と簡単な遊戯など致し、薬剤師さんは村の病人達に薬を配ると大変な人ばかりで大盛況でした。

薬剤師さんの話しによりますと、薬など飲んだ事の無い村民は何の病気でも仁丹3粒で治ってしまい、潰瘍や傷、火傷などはヨーチンやオゾを塗っておくと直ぐに治ってしまうとの事で長い列が出来大評判でした。

キニーネはさすが貴重品なので日本人向けに少量持って行きましたが、マラリアで重体の村長夫人などに上げたらたちまち治ったとその宣撫効果は素晴らしい物でした。

夜はパッサングラハン（簡易旅館）に泊まり、食事は監理官官舎でご馳走になりました。

時には村長のお宅に招かれバナナの葉っぱに盛られた料理を手で摘まんで食べました。

翌日はもう次の村では噂を聞いて準備をして待つ居る次第で、どうせ置いといても占領軍に持って行かれるなら皆に配ってしまおうと、気前良く宣撫用のサロンやバジュウなど配りました。

一番人気は田崎さんの歌でその次は薬の配布でした。私も一生懸命ハーモニカを吹きインドネシアの歌を歌いまして下手なブギス語で話すと大喝采でした。

この時既に各地で独立運動の兆しが見え始め、それに便乗した盗賊の活躍などの情報が入りましたので、斎藤大尉は私に田崎さん始め皆の安全を守るために拳銃の携帯を認めまして、戦利品のコルトの弾倉回転式6連発の小型拳銃を持たせました。そんな物で安全を図れるとは思いませんが、気休めで結構面白がって野鳥などパンパンと撃ちまくり田崎さんに叱られました。

宣撫工作は1週間の予定でしたが品物が余ったので、もう少し回ろうと予定を延ばしましたら、斎藤さんが心配して途中まで迎えに来て呉れました。

斎藤さんは何も言わなかったが後で渡部さんがとても心配して夜も満足に寝てなかったと聞かされ、調子に乗って勝手なことを致し、申し訳無かったと心の中でお詫びいたしました。

あの宣撫工作が利いたのか建築資材はどんどん集まり建設もはかどりました。

9月に入りマカッサルよりドンドン人が移って参り、進駐軍の豪州軍もワタンポネにやってきました。派遣隊も解散致し皆さんは原隊に復帰いたし、豪軍による武器の接収もあり私の軍刀も供出致しましたが短刀だけ隠して置きました。

私は派遣隊を引き払い新しく出来た宿舎に移り、留守番と運び込まれた物品の番人を致す事になり、興南組から来た川崎氏と二人でこの仕事に就きました。彼は元相撲取りで体格も良く腕力にも優れて誠に頼もしい相棒でした。言葉も流暢だしそれに彼の子分のヤンパーと言う若者が我々の面倒を見て呉れまして、このヤンパーが実に良く働き、誠に気の利く人で料理も美味しいしとても助かりました。

川崎氏は中々の社交家で首長の甥とも仲良く、時折食事に招待されました。

彼と留守番をしている時マカッサルより運んできたトランク一杯の銀貨を我々の寝ている前の庭に埋めまして、これならば安心と番をして居りましたら、ある朝見ると大きな穴が開いて見事にトランクが消えて居りました。その前にもマカッサルより運ばれてきた職員のとランクが泥棒に捕られる事件があり、警戒して居りました矢先にやられまして、莫大な金額の被害なので、斎藤さんに申し訳無いと報告致しましたら、「相手が泥棒では致し

方ない、寝首を搔かれて命を取られるより無事だったので責任は私が取る」と言って呉れました。

然し埋めた時は私、川崎氏、ヤンパー、主計課の今井氏、川崎氏の5人だけで、相当深く1m以上掘ったので簡単には掘り返せられない筈なのに、どうして私たちの枕元近くにあるのに盗られたのかと疑問に思いましたが未だに真相は判りません。

その内川崎氏はヤンパーを連れて興南組に帰りました、私はヤンパーに世話に成った御礼に彼が一番欲しがっていた短刀をどうせ持っては居られないからと上げました。彼はとても喜び「トアンカチャマタの記念に大事に致します」と名残を惜しみました。

ドンドン民政部の職員達が着ましてとても賑やかになり知っている顔が集まり楽しい集団生活が始まりました。

その内街の中にも豪軍はドンドンと増え我々のキャンプの中にも時折入って来ましたが、将校は一応紳士で綺麗な英語を話しますが、兵隊は牧農か労働者か教育を受けてない人々で物凄い訛りのある英語で、勿論私のも **This is a pen** の手合いです。がピパーピパーと言うのでパイプかと思ったら紙のペーパーの事で丸っきり判りませんでした。何を見ても欲しがり時計、万年筆など見つけると半ば強奪されました。

私もジャカルタで兄に貰ったシーマーの腕時計を盗られましたが、何時か仇を取ってやろうと思って居ましたら遂にその機会がありました。

ボネに滞在中豪軍は我々の行動は自由で、好き勝手に街に遊びに行きました。丁度給料から天引きして居りました軍事郵便の貯金が全額払い戻しになり大金が入りました。持って居ても軍票は使えなくなるし紙切れに成るなら、幸い使える内に使おうと不思議な事に現地住民はオーストラリアの軍票より日本の旧軍票の方が喜ぶので、皆さんを引き連れ勝手知ったるワタンボネの街を案内致し、街外れの汚いが味は絶品と言う中華料理の店で毎日毎晩大宴会で、段段仲間も増え始め店は貸切で美味しい物を腹一杯食べて、最後に消化の良いパイヤを食べ、約30分の道のりをキャンプまで歩いて帰りました。

皆さんのお金が無くなるまでは大分の時間が掛かり、店で食べ終わり帰る時に翌日のメニューを注文して、子豚の丸焼きとかアヒル鶏や魚料理など、親父は盆と正月と一緒に来たような大喜びで、家族4人で仕舞には手伝いの人も雇い大繁盛でした。

お陰でマリンプンに移動するまで1ヶ月位の間に私は丸々と太り、栄養を蓄える事が出来まして多に健康の為に役立ちました。

或る日街を歩いて居ると5、6人の豪州兵に囲われました。その中に私の時計を盗った奴が居るのでヤバイと思って居りましたら、何か早口で喋りますが意味が通じなく困りますと、卑猥なジェスチャーでネシアの女の人を指差しましたので意味を察し、彼らは若く性に飢えて居て、その手の女を探してくれと言って居りました。

その点は渡部さんに街の隅々まで教えて貰った実績が有りますのでOKと下町に連れて行きまして **Jalan P** (ジャラン ピー) と呼ばれる街娼のたむろしている所に行きましたが、街娼は彼達の姿を見て恐がり逃げ出そうとしたので、私は「ヘイ、マックンライ ロッカ コマイ アジャマ シリシリ マ ガッテコ」(ハイ娘さん達恥ずかしがらぶにこっちに早くお出でよ) とブギス語で呼びとめました。彼らは言葉が判らず困っているので交渉する事になりました。

通常相場は1ルピーですが時計の仇を討たなくては成らないので「一人5ルピーだ」と言って人数の分を集め女に「2ルピーで話を付けてやったから」と金を渡したらとても喜び感謝して居りました。

余り誉められる行為では有りませんがこれで少しは時計の仇を討ったと思って居ましたら、翌日もまたその次も彼らに捕まり、段段に人数も増えましてお得意さんになり、彼女達も私を頼りに致しすっかりポン引き屋になってしまいました。

中華屋の勘定は任せて置けなどと皆さんに奢って上げるようになり、皆に「ブギス語を習って本当に役に立ったね」などと言われましたが、或る日街を車で走って居ると、あの時計野郎がおかしな歩き方をして居るので良く見ると彼は性病に罹り病院に行く所でした。

若し兄が死んでいたら形見に成る俺の時計を盗った報いだとやっとながれ取れた気が居たし、明日からはあそこには近寄れないと行かなくなりました。

10月に入りマカッサルから占領軍との引継ぎなどの仕事を終えた方たちがドンドンと増えて、湯浅さんも私の残したトランクに私物を詰めて持って来てくれました。

この宿舎は土木課の技師さんたちがご自慢の建築で、資材は竹とニッパですが設計が素晴らしく、トイレなども手動ですが水洗でとても良く出来て居ました。然し10月半ば頃突然連合軍より、南セレベスの日本人は全員マリンプンに集結せよとの命令が出ました。

この命令には驚きました、マリンプンと言えば先の第1次大戦の時、ドイツ兵の捕虜が収容されましたが殆ど死に絶え、またジャワよりの移民も全滅した死の草原と言われた場所でした。何故そこにとこれは大変な事になったと思いましたが、折角ワタンポネに楽園を建設したのにそれを捨てて行くのは残念だし、又マカッサルその他の各地より集結して来た人たちや、膨大な物資のマリンプンへの輸送など大問題が発生いたし、その日から輸送本部が置かれ、マリンプンでの収容所建設の人数を送ることに成りました。

私は輸送隊に属する事になり、物資の搬送に携わる事に成りましたが、マリンプンへはワタンポネよりポンパヌア経由で、ワタンソッペンに行き、パンカジェネからラッパンにピンランを通りマリンプンの草原に入りました。

夕方ボネを出まして徹夜で走り、明け方マリンプンに到着する行程で、運転手2名と警備1名の3名のチームでした。何度目かの時から途中で夜盗に陸軍の輸送隊が襲われ、死傷者が出たと情報が入り緊張いたしました。

時には武器を持った一団に停車を命ぜられこれは駄目かと覚悟を決めたら、覆面をした隊長らしき男が運転席を覗き込み「栗竹さんじゃないですか」と言われ驚きますと、派遣隊に居た兵補の班長でした。「武器になるものは有りませんか？」と言うので何も無いと言ったら、独立の為に戦うのだと言われ、頑張ってくれと言ったら栗竹さんも一緒に戦ってくれと言われたが、今は任務に付いて居るから駄目だ、考えて置くと言って激励して別れましたが肝が縮みました。でも知っている班長で良かったと思えました。

又或時は夜盗が道路一杯に焚き火を致しまして、車を止め様と待つて居ました。道が狭くターンする事が出来ないので100m位手前で止め、3人で相談して決死の覚悟で強行突破する事にして、目を瞑り直前でギアを落とし火の上をバリバリと乗り上げ乗り越しました。油に火が付いたらどうしよう等と考える暇も無く、山のような焚き火を蹴散らし火の粉を飛ばしながら全速力で走り抜けました。

泥棒達もまさか走り抜けるとは思わなかったのか、驚いて逃げ惑い私達も懸命に逃げました。然しスローに成った時3名ばかり飛び乗りましたが、警備に乗っていた地方課の剣道の名人西田氏が持っていた木刀で突き落とし事無きを得ましたが本当に恐い思いを致しました。

最終集合期限を決められ刻々と時は迫り皆寝る間も惜しんで頑張りました。

いよいよ最後の車になったとき、襲撃に備えて4台か5台の隊列を組んでワタンポネに別れを致す事に成りましたが、確か湯浅さんが輸送隊長でありました。その日街を通過すると師範学校の菅藤先生が歩いて居るのを見つけ、驚いて「先生これが最後の車だよ」と声を掛けると「全然連絡が無かった」との事で大急ぎで荷物を纏め車に乗って貰いました。若し行き逢わねば先生は大変な事に成る所でした。

途中中華料理屋の所を通りましたら家を取り壊して新しく新築して居りました。あの家も私達のお陰で大儲けの産物であろうと良い事をした気分でしたが、敗戦国日本では将来もあのような贅沢な中華料理は食べられないと懐かしく思いました。

もう二度と見る事の出来ない思い出の多いワタンポネの街に別れを告げまして、隊列は進みました。

沿道には顔見知りの人達が見送ってくれ、中には「トアン カチャマタ」と声を掛けてくれ果物やゴボス（インドネシアのちまき）など車に載せて呉れました。

当時のトラックは日産自動車戦時決戦号と言われた車で、運転席は木造でシートも木の

ベンチで少し走るとお尻が痛くなり、長いドライブでは体がミシミシ言う代物でした。それに散々酷使したのでタイヤもボロボロで、直ぐにパンクするので1時間毎に停車してパンクの修理でした。辛いのは修理後の空気入れて、これはいま思い出しても息が切れる辛い仕事でした。

マリンプン収容所



死の草原と言われた マリンプンの大草原 2001年10月 撮影

何回も途中停車して、翌日午前中にマリンプンの草原に到着致しました。先発の設営隊のお陰で宿舎は殆ど出来あがって居りました。

私達は民政部職員の入る第八群12棟に決まりまして荷物を置きました。民政部の職員はマリンプンとベンテン地区とに別れ、主計課の皆さんも二手に分かれて仕舞いました。

12群は一番外れで各課長クラスの方が多く偉い人ばかりでしたが、小笠原課長湯浅さん斎藤さんボネの渡部さん佐伯さんその他親しい方が大勢居りましてとても良かったです。

課長クラスやその他高等官の方は宿営委員会と言う協同生活運営の為の連絡機関の何かと仕事を任命されそれ、以外の人は各当番を決め階級の区別なく空いてる人は使役の仕事に付きました。

私も道路の整備やその他の使役に出かけましたが、マンデーの水には困りました。土地が悪く火山灰地帯みたいな石灰岩のようなので、井戸を掘っても白い水でマンデーをすると体が白粉を塗ったみたいに白くなり、乾くと粉ぼっく成りまして弱りました。

食事はおかずは美味しくは有りませんが、ワタンボネに居た時々贅沢な美味しいものばかり食べていたので致し方なく、その時蓄えた栄養と脂肪のお陰で当分の体力の維持は万全でした。

その内進駐軍がオーストラリア軍から英印軍に変わりました。時折使役などに出来ますとターバンを巻いたインド人の兵隊さんが監視に付いて来ます。彼らはとても親日的で道路工事などしていると「暑いから木陰に入って休め」と彼はドラム缶の上に上がって我々を見張るので無く、オートバイで巡察に来る将校を見張って来るとガンガンとドラム缶を叩き我々に教えて作業をしてる振りをさせました。

又良くネシアの農民がバナナやパイナップルなどの果物を担いで来ると、我々は彼らと接触すると銃殺などと言われ禁止されて居りましたが、着ているシャツなどを脱いで彼氏にこれと交換してきて呉れと頼むと、「シャツは良いから」と農民の所に行つて銃剣で「コラー」と追いかけて農民は驚いて荷物を投げて逃げて行くと、それを担いで来て皆に食べろと言って「日本は必ず近い将来にアジアの指導者となりインドとは兄弟だ」と言って居るとも

楽な使役でした。

嫌な使役も楽しいものになり、これもインドの人のお陰で英語の話す人が居ると何時までも話しこみ全然作業は進みませんでした。

抑留とはいえマリンプンの生活は規則正しく規律も守られ、電気なども引かれまして生活基盤も段々と整備されまして、医療も当時一流の医師の定期検診や診察など万全を期し、その内演芸会や映画の上映とか各専門家の学術講演、相撲その他のスポーツ競技会など色々なイベントが行われ、戦後話に聞くシベリヤの抑留者の悲劇などと比べると天と地の違いがありました。

その内各自宿舎の廻りに自家菜園を作り、あのジャワ移民が全滅した不毛の土地に農業指導員の講義を受け、皆さん驚くほどの成果を挙げました。

私も長茄子と落花生に挑戦致しましたが、落花生は失敗で山羊の餌に成りましたが、茄子は大成功で大きな実が沢山収穫され皆さんで食べました。

然しその陰には湯浅さんと二人で便所から肥料に肥を汲んできて、くさい思いをして撒いた事も有り大変でした。

復員の時期が迫る頃皆さんの菜園も収穫の最盛期で食卓は賑わい楽しい思い出です。

宿営委員会 食料配給班

或る日朝礼が終わると小笠原課長から呼び止められ「委員会の中に食料配給班と言うのが有るので、今日から其処に出向するように。」と言われてまして折角楽な仕事ばかりやってたのにと、事務所に行きますと皆さん年配の方で「ご苦労さん」と迎え入れてくれました。

班長は戦前より有りました米屋産業KKの社長で岡崎さんと言われ、関西弁で話すとても面白い人の良さそうな方で、若い時より南方に進出しておりオランダ語、英語、インドネシア語のとても上手な方でした。

副班長は三越の子会社で食料品の二幸の南方総支配人の服部さんで、この方との出会いが私の帰国後の運命を決めて下さいました恩人の一人です。あと司令部主計科より小日向兵曹長と山形兵曹が居られました。この二人は主計のベテランで歴戦の勇士であり、軍艦にも乗っていたので何でも知っている頼りになる方でした。司令部よりもう一人トラちゃんと呼ばれる若い上等水兵の方が来て居りましてこの人がとても良く働き、上官二人の手足の如く動くので感心致しました。その他各群から毎日当番で使役の人達が7、8人来て居りました。

服部さんが私の名前の章二を見て章魚と同じだと「タコチャン、タコチャン」と呼ぶのでとうとう皆さん私の事は「タコチャン」に成ってしまい、小笠原さんは亡くなる最近まで私のことは「タコチャン」でした。

皆さん若い私をととても可愛がって下さり、特に山形兵曹は弟の様に面倒を見てくださり色々と教えて下さいました。

配給班の仕事は陸海軍軍属一般邦人全ての抑留人員に対する食料配給の分配の公平と監視が主な仕事で、不正な人員申告が無い物品の授受は適正に行われて居るかを掌る配給の御目付け役でした。

毎月月初めに英印軍の司令部に前月の食料の配給状況とカロリーの計算書を届ける仕事がありました。書類は全部本部で作って呉れまして、本部に寄り届けるのが一番若い私の仕事でした。

マリンプンよりベンテンまで交通車に乗り、本部で英文の書類を受け取り進駐軍の司令部に持って行きました。司令部の主計科の士官は全員女性士官で金髪の確か中佐ぐらいの人が前任士官で、同じマリンプンに抑留されている画伯が画いた浮世絵風の春画をお土産



札幌三越屋上で服部さんと昭和24年8月

に持って行くとても喜び、碌に書類も見ないのに受け取りのサインをしてくれ帰りにレーションをお駄賃に呉れました。

このレーションを見たときにこれでは戦争に負けると思いました。四角い箱に入った携帯口糧で主食から副食、コーヒー、タバコ、ガム、その他全部揃っていて箱も油紙で最後は燃料になるなど至れり尽せりで感心致しました。とても美味しく高カロリーでビタミン剤まで入って日本の乾パンだけとは大違いでした。ただし途中で検問所があり身体検査でレーションが見つかるとその入手経路をしつこく聞かれ、通訳の方に今度はサインを貰って来る様と言われまして、次回からは大居張りを持って帰りました。

帰りにベンテンの病院に寄りまして、臨時看護婦として勤務している藤野さんや田崎さん他民政部の理事生の皆さんと会うのが楽しみでした。

藤野さんは何時も大忙しで碌に話しも出来ませんでした。田崎さんやウスベーこと白井さんは薬局の秋山薬剤軍医大尉の所に居たので、お土産に現地製のポマードや時には消毒用アルコールで作ったウイスキーなどの貴重品をお土産に貰って来るのがとても楽しみでした。

小日向兵曹長と山形さんは天才的頭脳の持ち主で、その場に有る物で応用して色々な物を作りました。また応用料理の名人で、缶詰で焼きこみご飯やチャーハンなどすぐに作り、その才能は驚く程でした。

配給班は群のほぼ中心に在りまして倉庫と宿舎兼事務所とが在り、通いは私だけで全員泊り込みで炊事はトラちゃんが山形さんの指示で作って居ました。

昼食だけ其処で食べましたがとても美味しく夜食も食べて帰りましたので、宿舎の連中が私の分が皆さんに渡るのでとても喜ばれました。

山形さんは物資調達の名人でネシアとの接触を禁じられて居りましたが、特別のルートがあるらしく配給班の宿舎には何でも有りまして鶏まで飼ひ最後は山羊まで裏庭で飼ってミルクを取れるようになり、良くミルクコーヒーを作ってご馳走して呉れました。

又空のドラム缶と椰子殻を利用して浄水機を作り、とても綺麗な水を作りまして班長の提案で各群にその作り方の指導に行き喜ばれました。

又使役に来る人たちが喜んで来たがるのは3時に山形さんとトラちゃんが作って呉れるお八つで、お腹を減らしている方にはとても魅力だったと思います。時には各群の炊事場で物物交換でお釜のお焦げを貰い、それを集めて油で加工いたしグラメラ（椰子砂糖）でオコシを作ってくれました。その美味しかったこと、使役当番の皆さんもとても大事にそうに食べて居りましたのが思い出されます。

配給品に油はとても重要な品目ですがこの配給の時に私がマリノに運んだ播公司より仕入れた落花生豆油があり懐かしく思い出し、とても高かったですが買って良かったと思いました。マリンプンの食生活も各群で大きな開きがあり、配給で各群を回って見ますとその格差は酷かったと思います。

一番良いのは実業団の商社関係で、その次が地元の司令部、民政部を始めとした地元部隊で一番惨めなのは何にも持たずに来た陸軍の撤退部隊で、地元の者はなにがしかの持ちこみ品や私物も有りますが、陸軍は何にも無く食事も配給だけでした。

配給の分量も一応は充分とは行かないが、白米は一人310gの割り当てがあり、空腹をまかなえる分量とカロリーは支給されて居りましたが、陸軍は海軍と違い上下の差別が酷く海軍の様に一艦一家と艦長は父で、部下は子供の精神が無く、聞いた話では上官たちは部下の食料をピンハネして腹一杯食べ、部下は時には二食で常にひもじい日常だったと聞いて、班長の岡崎さんが連絡会議の時に「配給には公平を期し全員に行き渡る様に成って居るのに、一部でその様な事実が有るのは民主主義に支障を来たす」と改善を申し入れましたが、我々配給班は決められた分量を炊事場の受領責任者まで届けるのが仕事で、それから先は各群内に任せてあるので介入する事が出来ず、陸軍と海軍との組織の差を痛感いたし、ひもじい兵士達に同情いたし鱈腹食べている上官をすごく憎みました。

陸軍部隊の酷い状況下でお米の配給の際、最後に到着した群ではトラックの荷台に零れたお米の取り合いで血を見る大ケンカが有りました。丁度山形さんと上乗りして居りまし

て仲裁に入った山形さんが怪我をする始末で、これは如何にかしななければならないと、山形さんの提案で荷台に竹で作ったスノコを置きましてお米を掃き寄せられない様にして、最後の群での当てにしている人達にはとても気の毒でしたが、危険を避けるために処置致しました。

その結果最後に倉庫に帰着いたし掃除を致しますと、結構沢山の砂と小砂利の混じったお米が残りました。それを運転手と使役の人達にコップに山盛り一杯ずつ分けて砂の一番多い残りをバケツに入れて居りました。私はこんな砂だらけのお米をどうするのかと思いましたが、山形さんはまず大きな丸いザルでゴミを取り、袋に入れて振りますと小石だけ下に溜まり、砂の混じったお米を取りまして「タコちゃん手伝って」と言って使うだけお米を何回も洗い、最後にバナナの幹を溝の様にした物にお米と水をかき混ぜながら流すと小石が残りお米だけ流れて行きました。最後にもう一度ザルで振りますと綺麗なお米だけ残り、後の砂だらけのお米は鶏の餌になりました。

このお米で私の大好きな牛肉大和煮の缶詰で炊きこみご飯を作って呉れまして、残りはお握りにして宿舎に持って帰り主計課の仲間と夜中にソート皆に内緒で食べました。美味しいので夢中で食べていると、ジャリと石を噛み嫌な気分になったのも懐かしい思い出で山形さんの面影が浮かびます。

山形さんは油の配給のとき、ドラム缶の底に沈殿したドロドロした沈殿物を精製して綺麗な油を取り出すのが名人でした。各群は空のドラム缶を欲しがりましたが必ず後で届けると約束致し、回収して油の再製を致しその量は石油缶3缶ぐらいに溜まり、交換したりまたもうその頃は各自の菜園の収穫も始まったので宿舎で、天麩羅や炒め物に貰って来て喜ばれました。

この作業も大変で5個くらい溜まると焚き火をしてドラム缶を暖め中の沈殿物を取り出し、それを煮まして何かを入れて缶で沈殿させますと上澄みに綺麗な油が取れました。その方法は極秘だそうで何回聞いても笑って教えて呉れませんでした。

一度倉庫に泥棒が入り食料が盗まれました。皆で交代で不寝番に立つことに成り私も泊まることに成りました。喜んだのは宿舎の連中で「もう帰って来るな」と言われました。泥棒はどうやらネシアらしく、山形さんとトラちゃんは何やら鋸で切っておりましたがそれは罫で2、3日経ってから私と岡崎さんが当番の時夜中に大きな音で皆飛び出したら3人ばかりで逃げて行くのが見えまして、翌朝見たら缶詰1箱と豆の袋がなくなって居ましたが、ピン(ナイフ)も落ちており皆で深追いすると命に関わると、倉庫の廻りに綱を回し空き缶などをぶら下げて鳴子のような物を作りましたらもう来なくなりました。

今でも思い出するのが私の誕生日のとき山形さんがカッチャン、イジョー(青豆)で餡子を作りお萩を沢山作って呉れまして、皆で祝って下さり宿舎の人達の人数分作って、皆さんにお土産に持って行くようにしてくれた事は今でも忘れません、復員後お便り致しましたが確か九州の方で遂に音信不通になったのはお世話に成ったのに残念でした。

又服部さんは「タコチャンは帰ってから就職の当ては有るのか？」と言われましたが、勿論「当ては有りません」とお答えしたら「よし、お前の面倒は見てやろう」と言われ、復員の時ご一緒に大磯のお宅まで連れて行かれ、一泊して翌日焼け残った二幸の本社と木挽町の工場に連れて行き当時三越が北海道の増毛に建設中の水産工場の社員として然も三越の正社員としての入社確約を取って下さいました。お蔭様で就職難の当時に破格の待遇で三越に就職でき、あの戦後の厳しい状況のもと、楽しい増毛の生活を送る事が出来ました。、このご恩は忘れません。

21年5月頃から内地復員の話が出始めまして、やっと帰れるようになったと言う安堵と帰国後の不安が入り混じった気持ちでしたが、その内5月に入り復員の話も具体化してきましたので、配給班は整理の仕事に入り実業団、民政部他マカッサル在住者関係は第一便と決まり慌ただしい毎を送りました。

在庫食料を出きるだけ配給して、後は復員船に積み込む用意を忙しく済ませました。

配給班の宿舎では山形さんがお別れ送別会の準備にトラちゃんと大忙しで、最初山羊を殺して皆で食べようと言ってましたが、何ヶ月か飼っている内に情が移り、岡崎さんの反対でここでは殺さない様に話が決まり、他の炊事場で処分して貰い肉が来ましたが誰も食べず宿舎に持って帰り皆さんから大歓声を戴きましたが、私は山羊の傍に行くとメーと鳴きながら嬉しそうに寄ってくる姿を思い出し、最後まで遂に食べられませんでした。

砂の混じったこぼれ米を食べて増えていった鶏は以前にも絞めて食べましたが、これは最後と山形さんの腕の見せ所と色々な料理で食べました。

私が配給班に出向したお陰で良い思いをしたとは一切口に出さず内諸の話で、時折山形さん始め班長や班員皆さんの好意で宿舎の皆さんにお土産を持って行く事と、私の食事の分が皆さんに食べてもらえる事で良心の呵責に耐えました。

配給班の解散も決まり残品の整理で各群に公平に渡す様に配分を致し最後に群の受領責任者で籤引きを致し仲良く皆で残品整理を致しましたが、推測ですが皆さんちゃんと宿舎まで持って行ったのかなと思いました。

それでも半端な物が残りましたので、岡崎さんや服部さんが「タコちゃんは良くやったから宿舎にお土産に持って行きなさい」と言われ大喜び致しまして、宿舎に行き別府さんや今井さんの手を借り暗くなって宿舎に南京豆の大袋や青豆、砂糖の半端など沢山戴き、宿舎の皆さんからとても喜ばれました。

宿舎で一緒だった僧籍の有る今西司政官が手相を見るのが趣味で、私の手を見て「栗竹君君は稀にみる強い運勢の持ち主で食には不自由しない良い運勢をもて居て、羨ましい」と言われた事が有りましたが、北海道に行っても食糧難の時代に三越さんのお陰で3度の食事も白米を食べられたし、今までひもじい思いをしたことが有りません。

今西司政官の手相が当たり本当に有り難いことだと感謝して居りますと同時に私を配給班に出向させて下さった小笠原さんに深く感謝致して居ります。

短い期間でしたが一生懸命働き皆さんに可愛がられた5ヶ月ばかりの時を今でも懐かしく思い出して居ります。

復員、引揚げ船

引揚げの話が具体化するとその準備に忙殺されました。先ず私物の整理ですが、兄にジャカルタで貰った黒革のWの立派なトランクは余り大き過ぎて持って行くことが出来ず誠に残念ですが破棄する事に決め、兄に貰ったカーキ色の厚手の服地で手製のリュックを作りました。全部の物を持って行くことは出来ず、それにマリンプンから乗船地のパレパレまで夜通し行軍するので、重いと困るので色々品選びには困りました。帰っても何も無いし少しでも持って行きたいし、毎日考え入れ替えを致しました。

貴金属その他金目の物は一切携帯が許されず厳重な持ち物検査があり、若し違反するとその班全員の乗船が出来ないと云われ、皆さん貴重品の整理に苦悩致しました。私もヨッピーから貰った10ギルダ金貨をどうしても持って帰りたいと思い石鹼の中に埋めこみ使って判らなくしましたが、レントゲンのようなもので調べるとデマが飛び、出発前夜マリンプンの土の中に埋めてきました。後で皆デマと判りあの石鹼なんか何でもなく持って帰れたのにと悔やまれましたが、若しデマが事実で有ったら皆さんに大変な迷惑が掛かり取り返しの出来ない事に成ると思えば、あの選択は致し方無かったと心でヨッピーに詫びております。

いよいよ出発の日に私が突然熱を出し激しい悪寒に襲われ以前患った三日熱マラリアが出て仕舞いました。私は時間が経てば大丈夫と言ったのですが、皆さんが心配して手配して下さり病人が乗るトラックに乗せて呉れました。

トラックで明け方パレパレ近くの臨時収容所に到着致しましたら、又悪寒が出て皆さんが押え付けて震えを静めて呉れました。

これはえらい事になってしまった若し船の中で出たらどうしようと不安に成りましたら、駐在のドクターがこれを持って行きなさいと貴重品の糖衣錠のキニーネ100錠入りの瓶

を下さいました。驚いてドクターのお顔を見るとマカッサル病院の内科の先生で、以前お世話になった先生で私の事覚えて居て下さり本当に助かりました。(この薬のお陰で戦後どんなにか助かったか知れません)

船はリバテー船で船倉に蚕棚でやっと横になれるスペースが有る程度で、荷物の検査など無く、無事乗船致し船はパレパレを後に致しました。航海は順調でフィリッピン沖を通り一路内地にと向かいました。

船内では暑くて居られないので皆甲板に出て船と並んで泳ぐイルカを見たり顔馴染の皆さんと色々なはなしを致し余り退屈は致しませんでした。

食事はお粗末で十分な食料を積み込んだのに一度も出ず、遂いに抗議してやっと青豆のお汁粉が一度だけ出ましたが積み込んだ沢山の米、砂糖、缶詰めなどは後で聞くと皆船員達が横領して、港に到着後闇に流して大儲けを致したとの事で、我々としては運んでもらって居る弱みも有るしほんとに残念でした。

然し命からがら帰って来る者の持参した食料を横取りするとはまったく酷い話で、悪い奴らだと憤りを感じましたが、彼らの言い分は船員は戦時中にゴミの様に使い捨てられたのだから生き残った今は此れぐらいの余禄は当たり前だと言ってましたが、此れも戦争の悲劇です。

船中ではトラブルも沢山有りましたが、嫌な思い出は忘れる事にしているので楽しい事だけ書きますと、一度演芸会がありまして藤山一郎楽団の方々が音楽を聞かせてくださり、内地に帰ってからの不安を少しでも忘れる一時でした。皆さん帰国後の住所の交換などしてましたが、私は深川の家が2月10日の大空襲で壊滅したのをニュースで知って居りましたし家族の安否も不明だったので一応前住所を皆さんお知らせ致しました。

段々と内地が近くなり、名古屋に入港すると聞かされました。5月21日に名古屋の三菱重工ドックの岸壁に着きました。その爆撃による破壊の物凄い事まったくの壊滅状態で息を飲みました。

上陸致し早速にシャワーを浴び頭からDDTを掛けられました。その間に荷物の消毒があり係員が並べてある荷物にDDTを掛けて行きました。

其の晩は簡易ベットに寝る事になりまして、荷物を調べると小物が盗まれて居りました。皆さん騒ぎ出しましたが、犯人の特定が出来ず泣き寝入りに成りました。私も小さな姪にと新しいトランプとコールゲートのパウダー、LUXの石鹸など兄に貰った新しい革の財布などが盗まれて居りました。

同じ日本人なのに何も無い処に帰る外地からの引揚げ者の荷物を盗むなど、本当に情け無く成りましたが、後で冷静になって考えると盗ったこれらの品物もきっと其の人も欲しかったのでは無いかと、又闇市などに持って行けば子供達のお腹を満足させられたのでは無いかと思ひ、石鹸以外は出して必要な物でもないしと諦めました。

5月だと言うのに大きなドームの中でベットを並べて寝るのはとても寒く、ガタガタと震えて又マラリアの悪寒が出るのでは無いかと心配致しましたが、咽喉が痛くなり満足に眠れませんでした。やがて夜が明け帰宅の準備に掛かりました。

留守家族の情報などを見ると高尾山の旅館が連絡先になって居りまして連絡先が有るくらいなら家族全滅は無いと安心して電報を打って貰いました。

期間は忘れましたが日本全国共通の鉄道切符と300円と森永のキャラメルを1個貰い東京行きの汽車に乗りました。途中の沿道で人々が日の丸の小旗を振り「ご苦労様お帰りなさい」と叫んで出迎えてくださいました。踏み切りなどで小さな子供が居ると、皆さん涙を流しながらキャラメルの粒を窓から投げました。

私も姪が居る事を忘れ半分くらい投げ与えまして姪を想いだし慌てて残りをしまいました。帰りは服部さんと一緒にその経緯は前述致しました通りです。

帰宅、家族と再会

銀座で服部さんと別れ、一応深川まで行けば親戚も沢山居るしと歩いて行きますと、焼け野原にバラックが建ち昔の面影は有りませんでした。やがて永代橋の無事な姿を見て感無量でした。橋を渡り永代に行きましたら親戚は漁師ですから景気が良く立派な家を建てて居りました。訪ねるとおじさんが出てきて「章ちゃんじゃないか良く無事で帰って来たね、昨日健ちゃん（兄の通称）が帰ってきたよ」と言うので驚いて、皆無事ですぐ傍の福住町の焼け残った長屋に住んでいると連れって行って呉れました。

表からおじさんが大きな声で「章ちゃんが帰って来たよ」と言ったら、兄や皆居て一度に二人帰ったので大変喜び皆の無事を喜び合いました。

姉は大変苦勞したと察し留守の礼を言いました。以前の私に比べ太ったので姉は私が栄養失調で浮腫んでいるのだと心配致しましたが、口には出さずでしたがワタンポネで散々栄養を蓄積致し、マリンプンで規則正しい生活と山形さんのお陰で栄養を取って居りましたので、其のお陰でマルマルと栄養万点の体で帰って参り、北海道に行くまでの食料不足にも平気な体力を維持できました。

兄は私より前日に矢張り名古屋に復員致し、殆ど同じに帰れるとは日頃信仰している神様のお陰と、神信心の父は早速御礼参りに行くと言っていました。

兄はジャカルタ時代の縁で日本冷蔵KKに入社が決まり、私が三越に決まったと聞いて皆とても喜んで呉れました。但し私は未だ工場が出来ないので12月頃の赴任になるが其れまで姉にお世話になると言ったら、私の家族渡しの給料は全部貯金してあるとの事で、私が復員事務局から貰った300円と通帳を姉に渡し宜しくと頼みました。

私達二人の帰国を誰よりも喜んで呉れたのは叔父、叔母たちで物の無い時にお酒を手に入れ御赤飯を炊いて祝って呉れました。

今思えば兄が先に軍属としてジャカルタに行き、私のセレベス行きが決まった時「章二まで戦地に送る事は無い」と親戚の反対を押し切って出して呉れた父の判断は正しかったのだとその決断に感謝致しました。あの状況では私もどのような事になったかも知れず、若しかしたら死んでいたかも知れません。本当に私は運が良かったのだと感謝して居ります。

昭和19年1月30日に家を出発致し21年5月23日に家に帰るまで約2年4ヶ月843日間の私の戦争は終わりました。

この間私は多くの方々のご指導ご鞭撻と大きな愛情を戴き成長して参りました。、本当に色々な事を学び私の生涯忘れる事の出来ない思い出を下さいました。

私にとってのこの戦争体験は決して無意味ではないと思っております。お世話に成りました方々は殆どが亡くなり想いでの人と成ってしまいました。

お世話に成った皆様方の御冥福を心よりお祈り致し、この拙い文を閉じたいと思います。

あとがき

現在80才の私にとって戦争に参加した期間はたった2年4ヶ月の短い間ですが、その間出会った方々とは生涯お世話に成りました。

先輩の藤野さんは兄の魚市場の店の経理を勤め、兄嫁の弟と結婚致し、今では中池夫人として親戚になりました。又隣の地方課のウスベーこと臼井さんは矢張り民政部に居た西村氏と結婚して、兄の世話で魚市場銀鱗会事務長として、魚河岸のお母さんと新聞にまで取り上げられた名物お婆さんで、亡くなるまで戦友会の纏め役として皆に慕われ、我が家とは家族ぐるみの付き合いでした。

小笠原課長は民政部関係戦友会会長として、最後お亡くなりになるまで親しくお付き合いを願い、二人の娘の結婚式には主賓をお願い致し、又斎藤さんも次女の結婚式の際は三菱重工の子会社の社長だったので婿が日本郵船で相手側来賓が皆ご挨拶が見え、大いにに面目を施しました。

小笠原、斎藤、佐伯、中村、中池、役（添田）西村、大村、浅野氏などマカッサル時代の戦友は必ず娘の結婚式に出て下さり皆さん家族ぐるみのお付き合いでした。

湯浅さんは京都で最後「トンチンカン」と言う豚料理屋さんを経営致し、大いに繁盛致しましたが、還暦前に癌で亡くなり、兄弟の様にお付き合い願ひ、東京に来るとご自分の兄弟が居るのに我が家に泊まり、最後までウスベーや佐伯さんと長距離ドライブをしたりとても親しく付き合っていました。その他民政部に居られた方々も、西村さんの音頭で戦友会の度に大勢集まり盛況でしたが、段々と鬼界に入る方が増え今では6、7人と寂しく成りました。

然し80才をとっくに越えたお婆あちゃん達がマカッサル時代を話すとき、まるで昨日あったことの様生き活きと眼を輝かして話すのは、皆さん青春時代を送ったマカッサルのことが忘れられないのだと不思議な魅力を感じます。

もう一人私にとっての大恩人は服部さんで、あの戦後の混乱期に私を認めて下さいまして、三越に正社員として採用する様に推薦致して下さい、増毛の工場では経理の仕事に付かせ、本田主任に眼を掛けられまして可愛がられ、私より先輩がいるのに主帳簿を任せられ、中学卒では破格の待遇でたいへん優遇されました。

本社よりの重役や社長視察の際の宴会の折も、先輩が居るのに服部さんと本田さんの指示で末席に座ることも有り、先輩に苛められたことも多多有りました。

町では「三越の栗竹さん」と大騒ぎされまして、拓銀支店長の娘さんの婿にとの話しも服部さんが進め「お前の嫁さんは俺が探す」と言われました。

其のうち家業の魚市場仲買権が復活致し、いずれ兄が父の跡を次いで魚市場に入れば兄が経営して居りましたニチレイ販売店の顧客が勿体無いし、学歴の無い私では三越のような慶応出でないと出世出来ない処で何時まで働いても先が見えてるので考えろと兄が言うので、服部さんに相談したら「三越に居れば一生宮仕えだが店をやれば一城の主だから自分の問題だから良く考えろ」と言われました。

結局後者の道を選びましたが長い人生紆余屈折がありましたが、今この様な幸せな生活が送れるのも、皆戦時中にお世話に成った方々のお陰と皆様の御冥福を祈りつつ幸せな毎日に感謝して居ります。

(2006年10月)

懐かしい面影



昭和19年当時 民政部女子理事生 女子宿舎にて



当時の第1女子宿舎 2005年6月撮影



敷島通り12番地元官舎前で湯浅さんと



課長官舎前、湯浅、藤野氏と



高砂通り13番地官舎私の部屋入り口



セレベス会創設記念昭和34年11月21日コメットにて



斎藤、浜岡氏を迎えて 昭和35年 コメットにて



台湾より邱氏来日主計課集合、田園調布昭和49年10月



関西組を交え戦友会 昭和62年5月16日箱根観山苑



今は亡き秋山軍医大尉、大村さん、小笠原課長と役（添田）さん、私 箱根にて



小笠原さん最後の戦友会 平成4年3月八重洲にて



西山課長、を迎え田園調布新築祝い昭和37年2月



昭和53年2月 箱根観山苑にて



京都「とんちんかん」湯浅夫妻 昭和38年3月



増毛三越事業所 昭和22年5月



波多野部長、本田主任



南方出発昭和18年12月



復員記念21年9月

